

都地・七反田遺跡

—市道野方・金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集

1990

福岡市教育委員会

都地・七反田遺跡

—市道野方・金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集

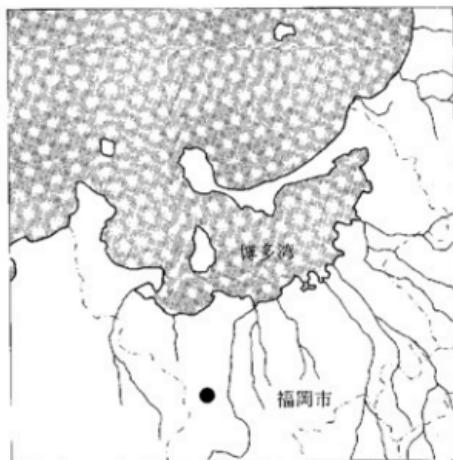
1990

福岡市教育委員会

と　じ　なな　たん　だ

都地・七反田遺跡

福岡市西区大字吉武所在遺跡の調査



1990年3月

福岡市教育委員会



SK01 土壙墓化粧箱出土状態（北から）

序

福岡市西部の室見川左岸台地一帯には、吉武高木遺跡をはじめ豊かな文化遺産が数多く残されています。

福岡市では昭和57年の西区の分区に伴い基幹道路の整備が急務となり、西区の方から金武までの道路の新設および改良が進められてきましたが、室見川左岸台地を縦断するその路線内には埋蔵文化財包蔵地が数箇所含まれることから、事前に記録の保存が必要となり、その成果の一部はすでに埋蔵文化財調査報告書としてまとめられています。

本書は昭和61年度に実施しました西区大字吉武所在の都地・七反田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査の結果、古墳時代の集落、祭祀関係遺物、平安時代末の貴婦人の墓など興味深いものが多々出土しています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまで地元、福岡土木局、西区役所の関係者をはじめ多くの方々のご理解とご協力に対し、心から謝意を表します。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は福岡市土木局・西区役所による市道野方・金武線建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施した都地遺跡第4次・七反田遺跡の調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は二宮忠司、佐藤一郎、吉武学、山村信栄、大庭友子が、撮影は二宮、佐藤、吉武があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測はIIを吉武、IIIは佐藤（石器は吉武による）が、撮影も同様に分担してあたった。
4. 製図はIIIを吉武、宮井善朗、入江のり子、撫養久美子、IVの遺構を藤村佳公恵、遺物は佐藤（石器は吉武による）が行った。
5. 本書の執筆は、I、II、IVを佐藤、III、IVの石器については吉武が行った。
6. 本書に使用する方位は磁北で、真北との偏差 $6^{\circ}40'W$ である。
7. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管される。
8. 本書の編集は佐藤、吉武が行った。

本 文 目 次

序	
I はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	2
II 遺跡の位置と環境	3
III 都地遺跡 4次	5
1 発掘調査の概要	7
2 遺構	7
(1) 竪穴住居跡 (SC11)	7
(2) 土坑	10
(3) 堀立柱建物	12
3 遺物	18
(1) 遺構に伴う遺物	18
(2) その他の遺物	19
4 小結	21
IV 七反田遺跡	25
1 発掘調査の概要	25
2 遺構と遺物	25
1) 検出遺構	25
竪穴住居跡	25
堀立柱建物	29
土壙墓	34
土壙	36
河川	38
製鉄関係遺構	40
2) 出土遺物	42
竪穴住居跡出土遺物	42
柱穴・ピット状遺構出土遺物	43
土壙墓出土遺物	45
土壙出土遺物	47

河川出土遺物	49
小 結	59

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	4
都地遺跡	
第2図 都地遺跡4次調査区周辺地形図	8
第3図 SC11実測図	9
第4図 SC11竪断面図	10
第5図 土坑・埋甕実測図	11
第6図 掘立柱建物実測図・I	15
第7図 掘立柱建物実測図・II	16
第8図 掘立柱建物実測図・III	17
第9図 出土遺物実測図・I	20
第10図 出土遺物実測図・II	21
七反田遺跡	
第11図 発掘調査地域周辺図	折り込み
第12図 竪穴住居跡実測図(1)	27
第13図 竪穴住居跡実測図(2)	28
第14図 竪穴住居跡実測図(3)	26
第15図 掘立柱建物実測図(1)	31
第16図 掘立柱建物実測図(2)	32
第17図 掘立柱建物実測図(3)	33
第18図 土壙墓実測図	34
第19図 土壙実測図(1)	35
第20図 土壙実測図(2)	37
第21図 I区土層実測図	38
第22図 II区土層実測図	39
第23図 製鉄関係遺構配置図	40
第24図 製鉄関係遺構実測図	41
第25図 竪穴住居跡出土遺物実測図	43

第26図	柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図 (1).....	44
第27図	柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図 (2).....	46
第28図	土壤基出土遺物実測図.....	48
第29図	土壤出土遺物実測図 (1).....	50
第30図	土壤出土遺物実測図 (2).....	51
第31図	SD02出土土器実測図 (1)	52
第32図	SD02出土土器実測図 (2)	54
第33図	SD02出土器実測図 (3)	55
第34図	SD02出土遺物実測図 (4)	56
第35図	SD02出土木製品実測図	57
第36図	石器・鉄器実測図.....	58

図 版 目 次

都地遺跡

- | | | |
|------|--|--|
| 図版 1 | 1. 都地遺跡4次I区全景（北から） | 2. 都地遺跡4次II区全景（南から） |
| 図版 2 | 1. I区SC11（南東から）
3. I区SK18（東から）
5. I区SB03, 04（南東から） | 2. I区SK01（南から）
4. I区SX15（北西から）
6. I区SB07（南から） |
| 図版 3 | 1. I区SB12（南から）
3. II区SB27（北から）
5. II区SB31（北西から） | 2. I区SB13（南から）
4. II区SB29（西から）
6. II区SB32、33、34、35、36（西から） |

図版 4 都地遺跡4次出土遺物

図版 5 調査区空中写真

七反田遺跡

- | | | |
|------|---|--|
| 図版 6 | 1. I区全景（南から）
3. II区南（北から）
5. SD02北岸（東から） | 2. II区全景（南から）
4. SD02南岸（V層掘り下げ後、東から）
6. SD02土層（東から） |
| 図版 7 | 1. SD40建物（南東から）
3. SB43・44建物（東から）
5. SB48～50建物（東から） | 2. SB41・42建物（東から）
4. SB4444建物（東から）
6. SB46・47建物（東から） |
| 図版 8 | 1. SB11竖穴住居跡（東から） | 2. SB11b竖穴住居跡・かまと（南東から） |

3. SB04竪穴住居跡（東から） 4. SB04竪穴住居跡・かまど（南から）
 図版9 1. SB15竪穴住居跡（東から） 2. SK35土壙（南から）
 3. SK14土壙（南から）
 図版10 1. 製鉄関係遺構（北から） 2. 製鉄関係遺構（南から）
 3. SX37・38製鉄関係遺構（西から）
 図版11 1. SX36製鉄関係遺構土層（東から） 2. SX39製鉄関係遺構土層（南から）
 3. SX37・38製鉄関係遺構土層（北から） 4. SX39製鉄関係遺構土層（東から）
 図版12 1. SK01土壙墓（西から） 2. SK01土壙墓化粧箱出土状態（北から）
 3. SK01土壙墓 毛抜き出土状態（南から）
 図版13 SD02河川遺物出土状態（1）
 図版14 SD02河川遺物出土状態（2）
 図版15 竪穴住居跡・柱穴・ピット状遺構出土遺物(1)
 図版16 竪穴住居跡・柱穴・ピット状遺構出土遺物(2)
 図版17 竪穴ピット状遺構出土遺物(3)、土壙・SD02出土土器(1)
 図版18 SK01出土遺物
 図版19 土壙出土土器(2)、SD02出土桃種
 図版20 SD02出土土器(2)
 図版21 SD02・包含層出土遺物(1)
 図版22 SD02・包含層出土遺物(2)

表 目 次

第1表 野外・金武線路線内遺構発掘調査一覧表.....	1
第2表 竪穴住居跡一覧表.....	27
第3表 出土土器一覧表 (1).....	61
第4表 出土土器一覧表 (2).....	62

付 図

付図1. 都地遺跡第4次遺構配置図

付図2. 七反田遺跡遺構配置図

I はじめに

1 調査にいたる経過

福岡市では1982年(昭和57)年に、人口の増加に伴い現行の5行政区の内、西区を西区、早良区、城南区、に区分した。それに伴い、西区内の南北基幹道路の整備が急務になり、土木局道路計画課では同区西方から金武にいたるまでの道路新設・改良が計画された。計画実施にあたって土木局道路計画課から教育委員会文化部文化課(昭和60年度より機構改革により埋蔵文化財課)に対して、事業地内の埋蔵文化財分布の有無についての照会が年次計画に沿ってなされ、それを受けた文化課(埋蔵文化財課)は書類審査、現地踏査、および試掘調査を実施した。路線予定地は埋蔵文化財が数多く残されている室見川左岸台地を縦断するかたちとなり、埋蔵文化財が確認された事業地については双方および西区土木農林課が協議をかさね、記録保存のために発掘調査を実施することになった。

表に示すとおり、発掘調査は1983年(昭和58)年度に、都地遺跡、金武城田遺跡から始まる。都地遺跡からは弥生時代中期の甕棺墓群、金武城田遺跡からは古墳時代から奈良時代にかけての掘立柱建物・竪穴住居跡、製鐵遺構等が検出されている。1984年(昭和59)年度から1985年(昭和60)年度にかけては、吉武遺跡群で弥生時代中期を中心とする時期の甕棺墓群、1985年(昭和60)年度は、羽根戸原C遺跡で弥生時代中期を中心とする時期の集落の調査が実施された。

1986年(昭和61)年度分の調査は本報告で述べる都地遺跡・七反田遺跡にあたる。古墳時代の集落等が検出されている。1986年(昭和61)年度末から1987年(昭和62)年度にかけては太田遺跡・吉武遺跡群の調査が実施され、古墳時代・近世の集落等が検出されている。

事業次数	遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	所在地	報告書
1	都地遺跡群	1,630	830601~830731	大字金武字都地	市報186集
	金武城田遺跡	1,862	831221~840329	大字金武字城田	市報186集
2	吉武遺跡群	2,300	850326~850531	大字吉武字三十六	市報187集
3	羽根戸原C遺跡	1,562	851028~860407	大字羽根戸	市報188集
4	都地遺跡群	2,580	860514~860730	大字吉武字衣屋田	市報223集
5	七反田遺跡	2,145	861225~870315	大字吉武字七反田	市報223集
6	太田遺跡	3,200	870201~870425	大字飯盛	
7	吉武遺跡群	2,300	870301~870510	大字吉武	
	吉武遺跡群	1,480	870601~870909	大字飯盛	

第1表 野外・金武線路線内遺跡発掘調査一覧表

2 調査の組織

調査委託 福岡市土木局道路計画課・西区土木農林課

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

第1係長 折尾学(前任) 第1係長 飛高憲雄

座務担当 岸田隆(前任) 安倍徹

調査担当 試掘調査

池崎謙二(現福岡市博物館)・杉山富雄(現福岡市埋蔵文化財センター)

都地遺跡発掘調査

二宮忠司・佐藤一郎・吉武学

七反田遺跡発掘調査

二宮忠司・佐藤一郎

調査・整理補助

山村信榮(現太宰府市教育委員会)・大庭友子・藤村佳公恵

発掘作業

資料整理・調査協力者 井口菊太郎・牛尾豊・太田孝房・尾崎達也・鬼丸邦宏・榎太郎・榎光雄・柴田大正・平田勇夫・広田義美・結城弥澄・脇坂武実・相川和子・飯田千恵子・伊藤みどり・牛尾秋子・牛尾シキヨ・牛尾奈美枝・牛尾二三子・大内文恵・太田頼子・大穂朝子・大穂栄子・尾崎八重・金子ヨシ子・川口シゲノ・木浦志麻子・菊池栄子・柳スミ子・清水文代・正崎由須子・惣慶トミ子・多田映子・田中ヤス子・典略初・中牟田サカエ・鍋山千鶴子・西島タミエ・西島初子・西嶋マツ子・西嶋洋子・西納テル子・西納トシエ・能美八重子・浜田澄美枝・林嘉子・原ハナエ・原征子・平田千鶴子・平田政子・平田ミサ子・平野志津江・平野ミサヲ・藤タケ・藤崎洋子・藤野邦子・細川ミサヲ・掘尾久美子・丸山信枝・真名ユキエ・真鍋チエ子・森木久美子・森山早苗・八尋君代・山下アヤ子・山田トキエ・山西人美・桔城君江・結城シズ・結城千賀子・結城信子・横田松乃・吉岡貞代・吉岡タヤ子・吉岡スエ子・吉岡トク・吉岡蓮枝・吉田恵子・米島ハツネ・脇坂ミサヲ・脇坂レイコ・脇山喜代子

II 遺跡の位置と環境

福岡市西部では、背振山地から北に派生した西山(標高430m)・飯盛山(標高382m)・叶岳(標高341m)・高祖山(標高425m)山地と同じく背振山地から北に派生した油山(標高585m)山地の間を背振山地に源を発する室見川が北流し、早良平野が形成されているが、都地・七反田遺跡は、室見川の左岸、西山山地東北山麓の扇状地が台地化した金武台地の谷底平野をはさんで砂礫台地(低位段丘)上に位置する。

室見川の左岸、西山・飯盛山・叶岳山地の東北山麓の台地一帯は、遺跡の宝庫と言えるほどに、数多くの遺跡が分布している。

野方遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落・墳墓群が検出されている。

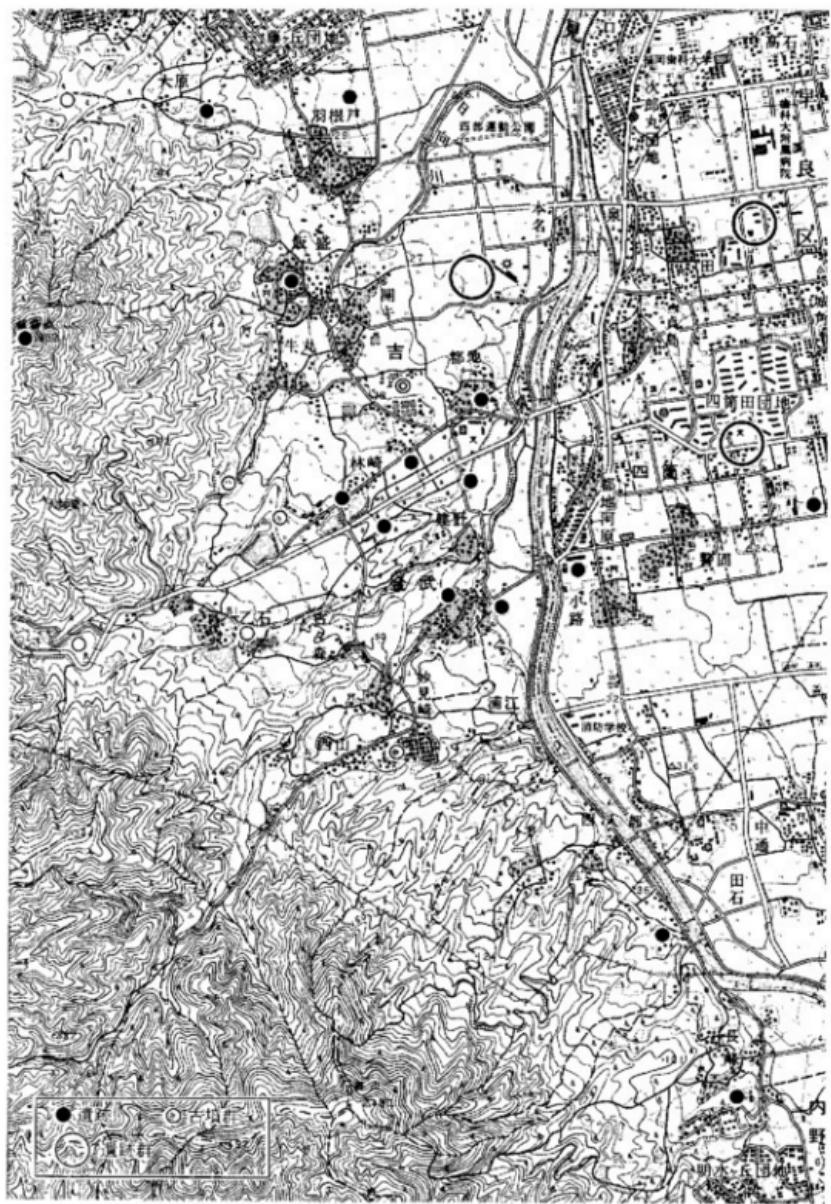
吉武遺跡群では、旧石器時代の遺物包含層が確認され、縄文時代後期の貯蔵穴群が検出されている。弥生時代をみていくと、吉武高木・大石地区では、前期末から中期初頭の甕棺墓・木棺墓から構成される墳墓群が確認され、多紐細文鏡・數多くの青銅製武器・玉類が出土している。中期後半から末になると甕棺墓が1000基以上検出されている。その内吉武桶渡地区では、墳丘墓が検出され、重圓文星雲鏡・鉄製武器等が出土している。古墳時代では、竪穴住居跡・掘立柱建物から構成される集落から、数多くの陶質土器・初期須恵器が出土している。奈良時代から平安時代にかけては、溝で区画された掘立柱建物が検出され、越州窯系青磁・円面鏡・八棱鏡・多量の瓦などが出土している。

西山・飯盛山の山裾部には、古墳時代後期の群集墳が多数築造されている。金武古墳群・羽根戸古墳群・羽根戸古墳群・野方古墳群などがその主たるものである。

台地の南部では、先述の都地遺跡、金武城田遺跡で調査が行われている。

註

1. 福岡市教育委員会 「福岡市野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集1974
2. 福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 1986
3. 福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 1988
4. 福岡市教育委員会 「羽根戸原C遺跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第188集
5. 福岡市教育委員会 「吉武高木」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986
6. 福岡市立歴史資料館 「早良工場とその時代」 福岡市歴史資料館特設展図録 1986
7. 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988
8. 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986
9. 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1989
10. 福岡市教育委員会 「金武古墳群調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集 1971
11. 福岡県教育委員会 「羽根戸古墳群」 福岡県埋蔵文化財調査報告書第57集 1980
12. 福岡市教育委員会 「羽根戸古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集 1989



第1図 周辺の遺跡

とじ 都地遺跡 4 次

市道野方・金武線新設・改良工事に伴う 4 次調査



遺 跡 略 号 TZI-4
遺 跡 調 査 番 号 8622

III. 都地遺跡4次

1. 発掘調査の概要

試掘調査の結果、南北160m、幅16mの道路建設予定部分の全域が調査対象範囲となつたが、工程の都合上、中央部を流れる水路を境に南北に分けて調査を行つた。まず北側を調査したためこれをI区とし、南側をII区とした。

調査地点は東北東に向かって伸びる低丘陵の北斜面にあり、調査区は南から北に向かって緩やかに下っている。現状は棚田状の水田であった。遺構面はかなりの削平を受けしており、遺構の残りは悪い。検出した遺構は次のとおりである。

古墳時代 竪穴住居跡1軒、土坑4基、掘立柱建物7棟

中・近世 土坑4基、掘立柱建物1棟

時期不明 土坑2基、掘立柱建物10棟

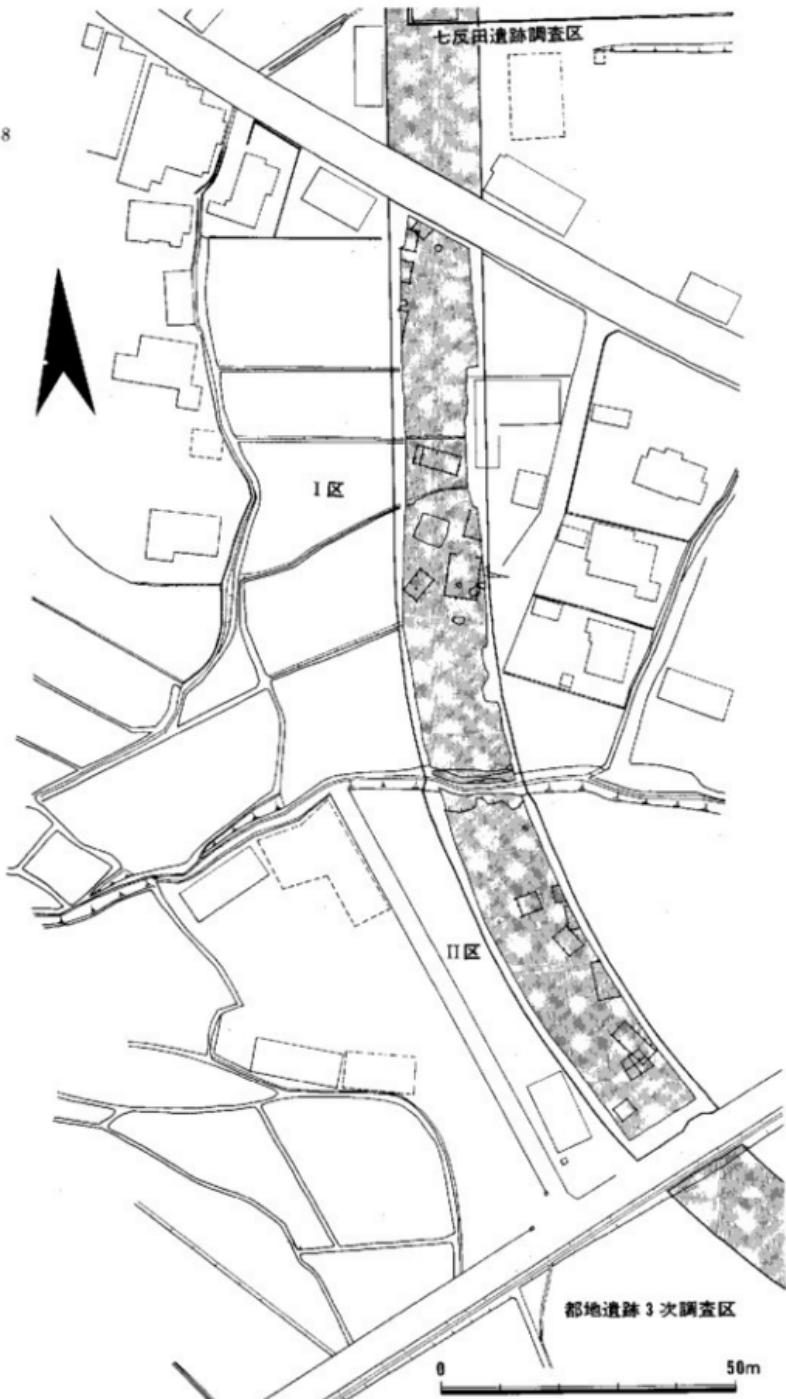
調査区内には縦横に走る浅い溝や段落ちが数条あるが、これは近世～現代の水田区画を示す溝と思われる。また、I・II区の間を流れる水路の下にその前身である自然流路(SD-37)を検出し、その最下層で8世紀代の遺物包含層を確認したが、本文中の説明は省略した。

遺構は発見順に連番号を付し、遺構の性格を示す記号としてSC：竪穴住居跡、SK：土坑、SB：掘立柱建物、SD：溝状遺構を用いた。

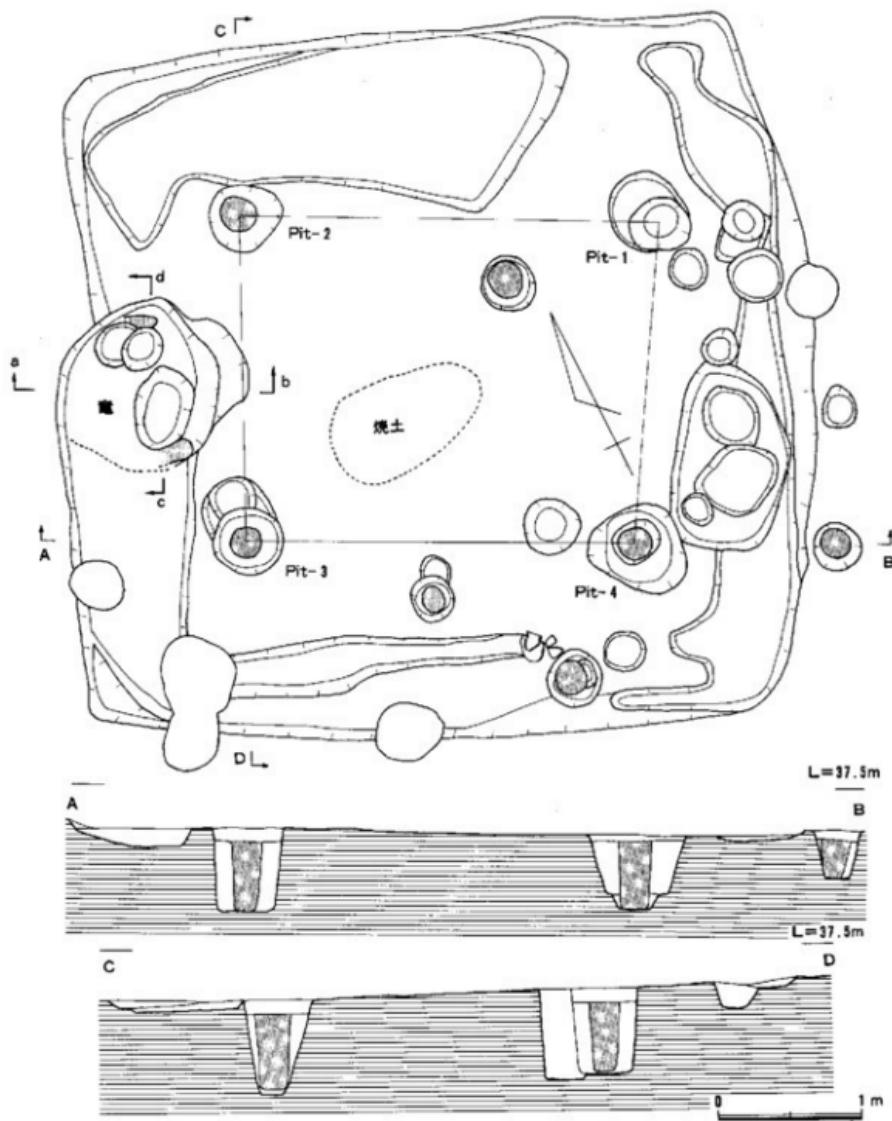
2. 遺 構

(1) 竪穴住居跡(SC11)第3図 図版2

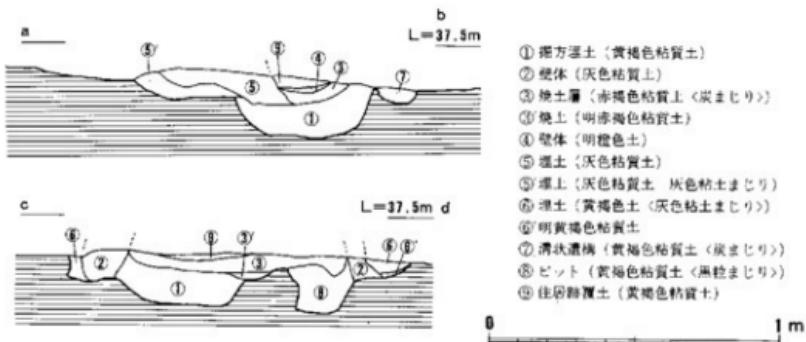
I区中央部で1棟を検出した。古墳時代後期の住居跡である。開口時に著しく削平されており、幸うして床面が残っている状態である。プランは方形を呈し、東西5.2m、南北4.9mを測る。住居跡床面には計25個の大小のピットが検出されたが、住居跡の主柱穴と考えられるのはpit-1～4で、うちpit-2～4には柱痕跡が確認された。柱痕跡の直径はいずれも22cmを測る。住居跡西側壁のほぼ中央部には造りつけの竈がある。遺存状態が悪く、基底部の粘土が残っているだけだが、幅1.1m、奥行き1.3mの円形を意識したプランに復元できよう。竈は灰色粘土で造られており、基底部は浅い皿状の掘り込みの中に据えられ、埋めて固定されている。竈内部には多量の炭化物を含む焼土が厚さ6cmに堆積しており、その直上を竈の上部を構成していたであろう灰色粘土が覆っているが、これは竈が破壊されたことを示すものであろうか。



第2図 都地遺跡 4 次調査区周辺地形図 (1/1000)



第3図 SC11実測図 (1/40)



第4図 SC-11断面(1/20)

また竈に付随する煙道等は精査したが確認できなかった。住居跡床面中央部には $1.1\text{m} \times 0.6\text{m}$ の範囲に炭化物を含む焼土が広がっている。住居跡の東側壁際の竈と対称をなす位置には深さ6cm程の浅い窪みがあり、更にここから東に住居跡を出た位置にはピットが2つ掘られているが、これらは住居跡の出入口に関わるものであろうか。また床面は4本の主柱穴に囲まれた部分以外が浅く窪んでいるが、この窪みは汚れた地山土で埋め戻され、床面中央のレベルに合わせて平坦に整地されている。住居跡からは、床面に貼り付いた状態で少数の土師器・須恵器が出土した。(第9図-1~4)

(2) 土坑 第5図 図版2

SK-01

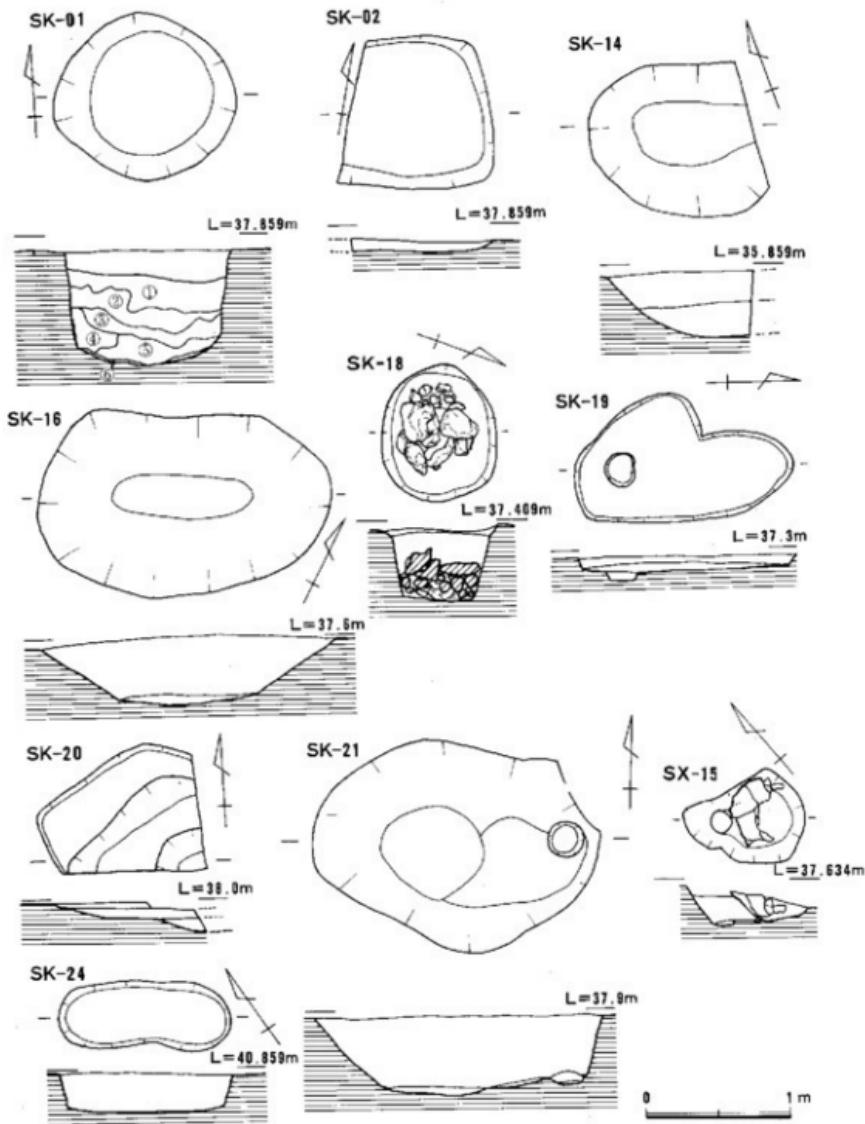
I区北端部で検出した円形プランの上坑である。直径1.2cm、深さ0.8mを測る。覆土は上から①灰色粘質土、②黄褐色粘質土、③①層と②層の混在土、④汚れた黄褐色粘質土(①層のブロックを含む)、⑤②層に①層のブロックを含む、⑥灰色粘質土であり⑥層を除き人為的に埋められたものである。当初は井戸の掘削を中途で放棄したものと考えたが、この土坑から低い方(北側)へ向かって3条の溝が掘られており、貯水を目的とした穴かもしれない。出土遺物にはすり鉢や瓦の破片などがあり(第9図-7、8)、中世の所産であろう。

SK-02

I区北端部で検出した。東西に長い隅丸方形プランの土坑だが、西側は調査区の外に及ぶ。短辺1m強、深さ0.1mを測る。土師質の土器2点が出土したが時期は明らかでない。

SK-14

I区中央東壁際に検出した東西に長い楕円形プランを呈する土坑で、東側は調査区外に及ぶ。



第5図 土坑・埋藏実測図 (1/40)

短径(南北)は1m強、深さ0.45mを測る。土坑覆土は褐色土で、土師器・須恵器の小片が出土しており、古墳時代に属する土坑と考えられる。

SK-16

SK-14の西隣に位置する東西に長い楕円形プランの土坑である。長径2m、短径1.2m、深さ0.45mを測る。出土遺物には陶磁器・須恵器・土師器の小片があり、近世以降の所産である。

SK-18

SK-16の西に1.5m離れて位置する。やや東西に長い円形プランを呈し、長径0.9m強、短径0.8m、深さ0.5m強を測る。土坑の中位以下には人頭大からこぶし大の花崗岩自然礫が詰まっている。とりわけ下位の礫に小さいものが多い。土坑覆土は灰色粘質土で、後述するSX-15と同質の變形土器片が含まれていた。近世以降に掘られた土坑であろう。

SK-19

SK-14から北へ4.5mに位置する南北に長い不整椭円形プランの上坑で、長径1.5m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。土坑底面の南寄りに浅いピットがある。土坑覆土からは土師器・須恵器の小片が出土し、それらは6世紀後半代の特徴を示している。

SK-20

I区南東隅でその一部を検出したが、土坑の大部分は調査区外にあり平面形は不明である。深さは0.2mを測る。土器の小片が2点出土したが時期は不明である。

SK-21

I区中央やや南寄りに検出した東西に長い楕円形プランの土坑で、長径2m弱、短径1.4m、深さ0.55mを測る。土坑底面には凹凸があり、西に向って浅い。覆土は暗褐色上で須恵器小片1点が出土した。古墳時代の土坑であろう。

SK-24

II区の北東隅に検出した東西に長い楕円形プランの土坑で、長径1.2m弱、短径0.45m、深さ0.25mを測る。出土遺物には土師器・須恵器の小片が数点ある。古墳時代の土坑であろう。

SX-15

I区中央部東寄りに位置し、前述のSK-16及び後述する掘立柱建物SB-12の柱穴に切られている。不整円形プランの上坑内に鉢形の土器が据えられた状態で出土した。土坑は北西-南東にやや長く、長径0.85m、短径0.65m、深さ0.25mを測る。鉢は削平を受け残りが悪く、底部は打ち欠かれて無い。近世以降のものと思われる。

(3) 掘立柱建物 第6~8図 図版2、3

掘立柱建物は計18棟を確認した。建物の検討は全て調査現場で行い、その際には柱間、柱筋

はむろん柱穴覆土の観察にも留意した。結果としてかなりいびつな建物となったものもあるが、ここではそれらはひとつの可能性を示すものとして提示した。

SB-03

I 区北端部に検出した。主軸方位をN-45°-Eにとる南西-北東に長い建物と思われるが、北東側は調査区の外に延びている。2間×2間以上で、東西の全長276cmを測る。柱穴は全て円形プランをなし、径は27~45cm、深さ12~16cmを測る。全ての柱穴に柱痕跡が認められ、平面円形を呈し、径は14~21cmを測る。柱穴からは遺物が出土しなかった。

SB-04

SB-03と一部が重複し、西側は調査区の外に及ぶ。後述するSB-05と並行して建つことから見て、東西に長い建物であろう。主軸方位はN-73°-W。2間×2間以上で、南北の全長348cmを測る。柱穴は平面が円形で、径は22~46cm、深さ16~31cmを測る。検出した6個の柱穴のうち5個に柱痕跡が認められた。柱痕跡は平面円形で、径は12~23cmを測る。柱穴から土師器・須恵器の小片が出土した。

SB-05

SB-04と並んで建ち、西側は調査区の外に延びる。主軸方位はN-79°-Wで、2間×2間以上。南北全長360cmを測る。柱穴は平面円形で、径は南西隅のひとつを除き30cm前後、深さ8~28cmである。北側の3個に柱痕跡を認め、そのプランは円形で、径11~22cmを測る。柱穴からは土師器の細片が出土した。

SB-06

SB-05の南に4.8m離れてその一部を検出した。調査区内で3間×1間を確認したが、大部分は調査区の西に伸展している。主軸方位はN-14°-Wにとる。柱穴は平面円形で、径は29~42cm、深さ10~34cmである。柱穴からは土師器の細片の他、瓶もしくは壺の底部片と思われる須恵器片1点を得た。(第9図-5)

SB-07

I 区中央部に検出した。桁、梁とも柱間が狭く大部分が1mに満たない。柱間に束柱を設けた西庇付きの桁行4間、梁行2間の建物であろう。桁行方位はN-72°-Wで、庇を含めた桁行全長757cm、梁行全長329cmを測る。柱穴は平面が円形で、径は25~44cm、深さ10~41cmである。検出した27個の柱穴のうち15個に柱痕跡が認められた。柱痕跡は平面円形で、径は9~22cmを測る。柱穴覆土は暗褐色を呈し、土師器の小片が多数出土した。(第9図-6)

SB-10

I 区中央部、竪穴住居跡SC-11の東に位置する。調査区内では3間×2間であるが、東側が区外に及び、全形は不明である。主軸方位はN-16°-Eにとる。柱穴は平面円形で、径31~50cm、深さ10~26cmである。7個の柱穴の内3個に柱痕跡を認め、そのプランは円形で、径18~21cmを測る。

cmを測る。柱穴からの出土遺物は無い。

SB-12

SB-10と約3m離れた南側に位置する。SX-15を切っている。桁行方位N-10°-E。桁行全長733cm、梁行全長544cmを測る。桁行9間だが、柱間は狭く等間ではない。また、梁行は6間だが北側中央部には柱列が存在しない。掘立柱建物の項に含めたが、杭列を用いた北側に開く何らかの囲いである可能性が高い。柱穴は円形プランをなし、径は24~50cm、深さ5~48cmである。柱痕跡は9個の柱穴に認められ、平面円形で、径は17~24cmである。北西隅の柱穴から陶磁器片が出土し、又SX-15を切る柱穴があることから見て、近世以降の建造物であろう。

SB-13

SB-12から西に約2m離れて位置する。南に庇の付く2間×2間の建物で、主軸方位はN-42°-Eにとる。身舎の規模は東西298cm、南北295cmとほぼ方形で、庇と身舎の間隔は170cmを測る。身舎と庇の柱穴に規模の違いはない、柱穴のプランは円形で、径29~47cm、深さ5~39cmである。検出した11個の柱穴のうち9個に柱痕跡を認め、そのプランは円形で、径は17~21cmを測る。柱穴からは土器の細片が2点出土したのみである。

SB-27

II区南西隅に検出した2間×2間の建物で、主軸方位はN-40°-Wにとる。南北に長く、全長300cm、東西は272cmを測る。柱穴は平面円形で、径19~39cm、深さ10~45cmである。柱痕跡は認められない。出土遺物はない。

SB-28

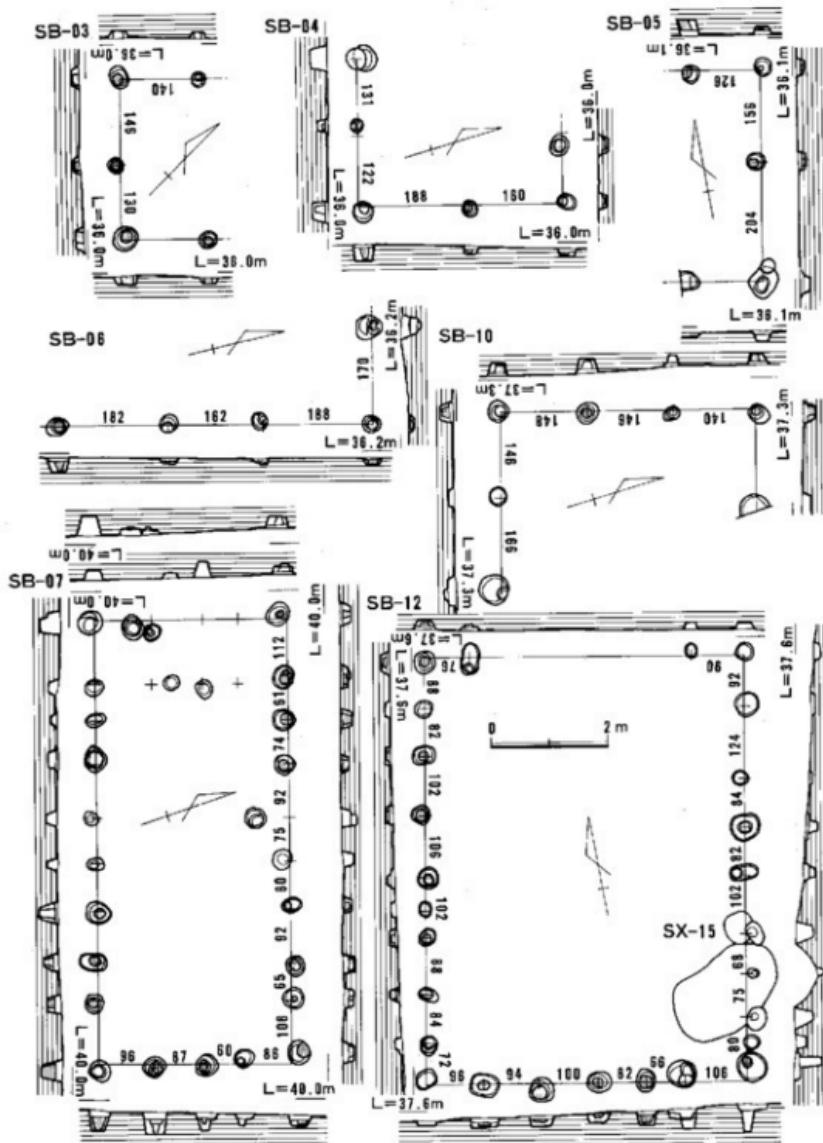
SB-27の北側に3m離れて位置する。2間×2間の総柱建物もしくは北庇付きの2間×1間の建物と考えたが、かなりいびつな建物となる。主軸方位はN-55°-Eにとる。東西にやや長く、東西全長416cm、南北は362cmを測る。柱穴は平面円形、径は23~50cm、深さ5~33cmである。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-29

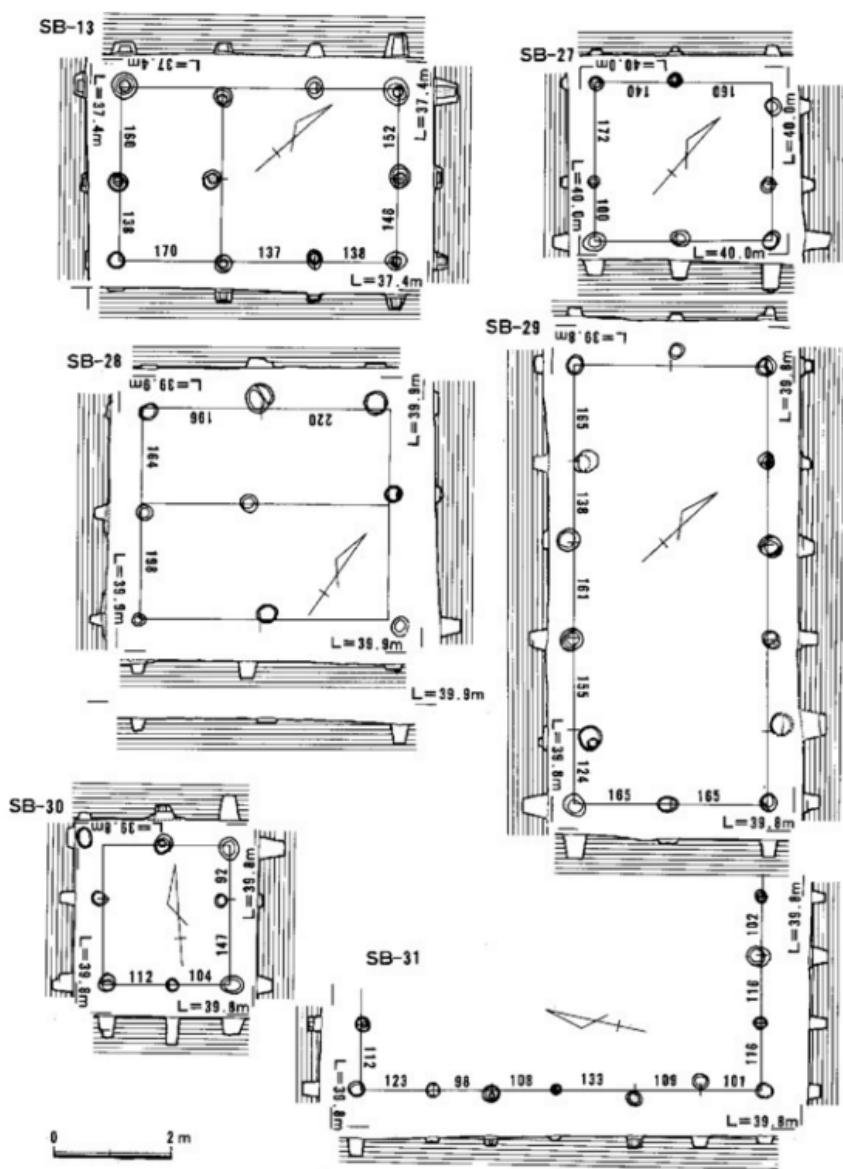
SB-28の東側に位置し、これと一部が重複する南北に長い建物である。桁行方位はN-47°-Wにとる。桁行5間、梁行2間で、桁行全長743cm、梁行全長330cmを測る。柱穴は平面が円形で、径は28~42cm、深さ7~41cmである。柱痕跡は認められない。柱穴からは須恵器・土師器の小片が出土した。

SB-30

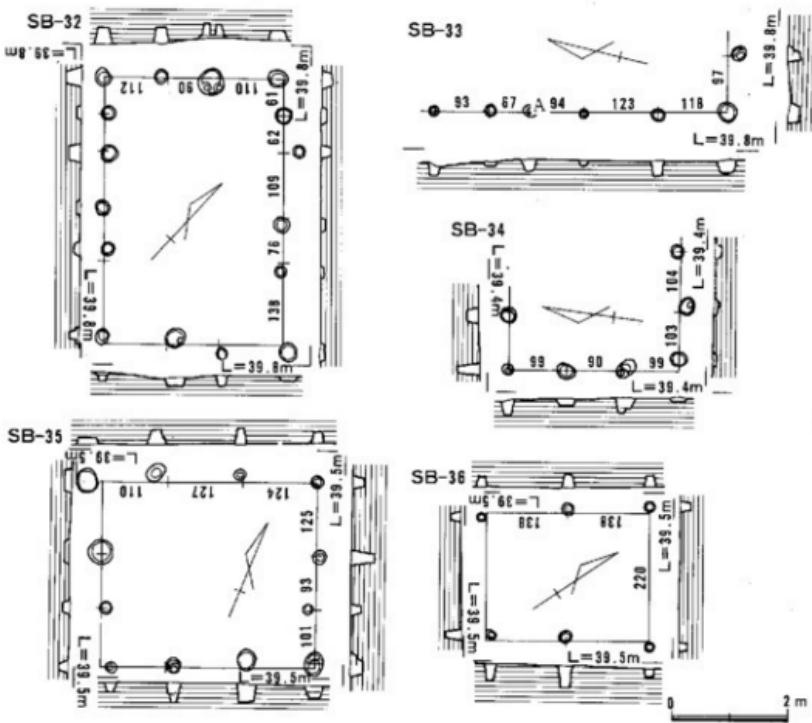
SB-29と一部が重複して西側に展開する2間×2間の建物である。主軸方位はN-4°-Eにとる。南北にやや長く全長239cm、東西全長216cmである。柱穴は平面円形で、径22~40cm、深さ7~46cmを測る。柱痕跡を認めるものがひとつあり、そのプランは円形で、径13cmである。出土遺物はない。



第6図 摂立柱建物実測図・I (1/100)



第7図 据立柱建物実測図・II (1/100)



第8図 振立柱建物実測図・III (1/100)

SB-31

SB-30から北へ6.5m離れて位置する。東側は調査区外に及ぶ。6間×3間以上の建物で、主軸方位はN-13°-Wとする。南北の全長672cmを測る。柱穴は円形プランをなし、径は19~31cm、深さ7~30cmである。柱痕跡は3個の柱穴に認められ、平面円形で、径は10~20cmである。柱穴からの出土遺物はない。

SB-32

II区の中央東寄りにあり、SB-31から北西に約3m離れている。桁行5間、梁行3間の南北に長い建物である。桁行方位はN-43°-Wとする。桁行全長446cm、梁行全長308cmを測り、桁行の柱間にはかなりバラつきがある。柱穴のプランは円形で、径20~34cm、深さ5~28cmであ

る。柱痕跡はない。柱穴からの出土遺物はない。

SB-33

SB-32と南西隅で接しながら、北へ展開する建物で、東側は調査区の外に延びる。5間×2間以上で、主軸方位はN-14°-Wにとる。南北の全長495cmである。柱穴は平面円形で、径17~36cm、深さ6~25cmを測る。柱痕跡は認められない。出土遺物はない。

SB-34

SB-33に接して北に展開する。東側は調査区の外に延びる。3間×2間以上の建物で、主軸方位はN-8°-Wにとる。南北の全長288cmを測る。柱穴は平面円形で、径は20~37cm、深さ6~39cmである。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-35

SB-34から2m離れた西側に位置する。3間×3間の東西にやや長い建物である。主軸方位はN-69°-Eにとる。東西全長361cm、南北全長319cmを測る。柱穴は平面が円形で、径は18~41cm、深さ7~38cmである。柱痕跡は認められない。出土遺物はない。

SB-36

SB-35と重複する東西に長い建物である。桁行2間、梁行1間で、桁行方位はN-35°-Eにとる。桁行全長276cm、梁行220cmである。柱穴は平面円形で、径16~22cm、深さ14~38cmを測る。柱痕跡は認められない。出土遺物はない。

3. 遺 物

(1) 遺構に伴う遺物

SC-11出土遺物 第9図-1~4 図版4

1は土師器の甕形土器で、口縁は緩く外反して開き、胴部は下位で膨らむ。復元口径13.1cmを測る。胎土に多量の砂粒、雲母粒を含む。色調は外面暗灯褐色、内面淡灰褐色を呈し、焼成は良好で胴部下位に黒斑がある。調整は内面が下→上のヘラ削り、外面は器面が剥げ落ちているが下端部に継位の刷毛目が残り、口縁は横ナデ調整する。

2は土師質の土器であるが、須恵器の生焼けの可能性がある。底部の破片であるが、坏であろうか。平底に近い丸底をなす。胎土は精良で雲母粒を含み、色調は灯色である。器面が磨滅して調整は不明である。内面にロクロ目が見られる。

3は須恵器の坏蓋であろう。小片のため法量不明である。胎土には砂粒を少量含む。内外淡灰青色を呈し、焼成はやや不良である。天井部にヘラ削りが見られ、ヘラ削りのロクロ回転は時計回りである。

4は須恵器の瓶もしくは壺の底部片である。胎土には少量の砂粒を含み、色調は灰青色を呈

する。焼成良好。外面下半部にヘラ削りを認め、ヘラ削りのロクロ回転は時計回りである。

SX-01出土遺物 第9図-1・8 図版4

7は平瓦の隅部分の小片である。厚さ2cmを測る。胎土に多量の砂粒を含み、黒褐色を呈し、焼成良好である。器面が磨滅しており、整形の痕跡を留めない。

8は陶器のすり鉢の小片である。胎土は精良で、色調は外面が風化して乳白色、内面灰青色を呈する。焼成不良。外面にロクロ目を残し、内外ともナデ調整で、内面に摺目をつける。

SX-15出土遺物 第10図 図版4

土坑内に据えられていた土器で、復元口径90cm前後の鉢形土器である。内湾して聞く器形をなし、口縁部は内外に粘土帯を貼付して厚くつくる。胎土に砂粒を多量に含み、外面黒褐色、内面淡褐～淡黒褐色を呈し、焼成はやや不良である。内面を丁寧にナデ調整し、口縁内外を横ナデする。外面は器面が剥落している。全体の約1周ほどを残している。底部はない。

掘立柱建物柱穴出土遺物 第9図-5・6 図版4

5はSB-06、6はSB-07の柱穴から出土した。

5は須恵器の瓶または壺の底部付近の破片である。胎土に砂粒を含み、色調は黒青色で、焼成は不良。外底面にヘラ削りを加える。

6は土師器の壺形土器片で、口縁が強く外反する。小片のため法量不明。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈し、焼成良好。胴部外面に刷毛目、内面にヘラ削りを加え、口縁内外を横ナデ調整する。

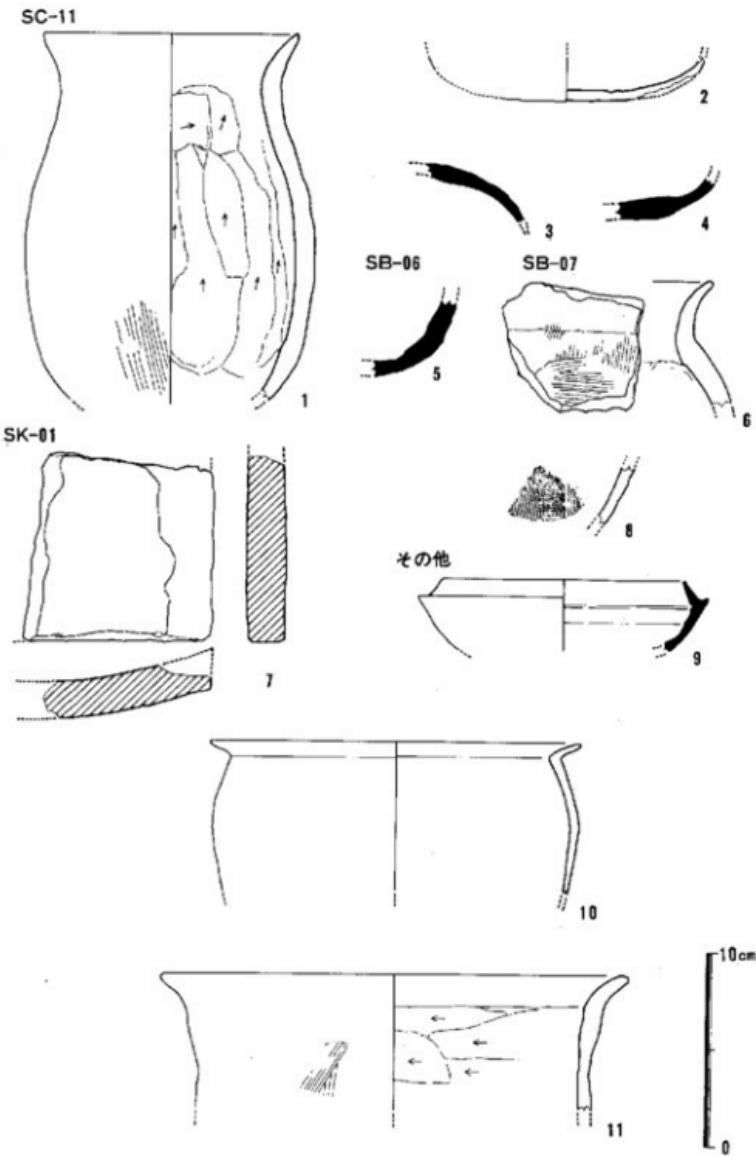
(2) その他の遺物

9～11は掘立柱建物としてまとまらないピットから出土した土器である。

9は須恵器壺身である。復元口径12.4cmを測る。蓋受けの立ち上がりは高くなく、内傾する。胎土に石英粒を含み、淡灰青色を呈し、焼成は良好である。体部外面の下端部にヘラ削りの痕がある。

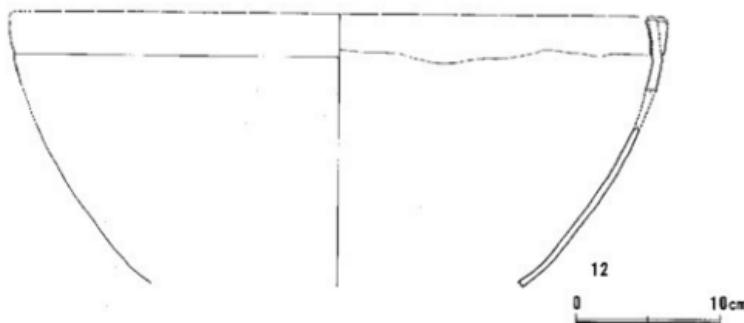
10は弥生上器の甕である。口縁は「く」字形に強く屈曲して開き、胴部の最大径は上位にある。復元口径19cmを測る。胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、灰白色を呈する。焼成は不良。器面が剥落して調整は不明である。

11は土師器の甕で、肩は張らず、口縁は緩く外反する。復元口径19cmを測る。胎土に砂粒、雲母粒を多量に含み、色調は外面灰～黒褐色、内面灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の大部分が剥落しているが、内面ヘラ削り、外面刷毛目調整であろう。



第9図 出土遺物実測図・I (1/3)

SX-15



第10図 出土遺物実測図・II (1/4)

4. 小 結

今回の調査では、古墳時代後期及び中・近世に属すると考えられる遺構と遺物が検出されが、出土遺物が極端に少なく、所属時期を明確にできないものが多い。また、他に奈良時代の土器なども河川から得られているが、古代の遺構は検出できなかった。

古墳時代後期の遺構としてはまず竪穴住居跡1棟がある。方形プランを呈し、4本柱で西壁に竈を持つ。また竈と対面する位置には浅い土坑がある。最近の調査例で、同位置に粘土を置いた住居跡の発見が相次いでおり、住居跡の出入りに供したものであろうとの説が出されているが、その中には粘土の下層にこのような土坑を掘るものがあり、当遺跡の住居跡もそれに類似したものであろう。掘立柱建物のうち、竪穴住居跡の周辺に位置するSB-07、10、13などはその配置と柱穴覆土の状況から住居跡と同時代である可能性が高い。また、土坑ではSK-14、19、21、24などが古墳時代に属するものと考えられる。

中・近世の遺構のうち、中世に通りそうなものはSK-01であろう。平瓦片やすり鉢片が出土したが、磨滅した小片であるため明確には時期を決め難い。また、SB-12、SX-15、SK-16とII区で検出した掘立柱建物の多くは出土遺物と覆土の土質から近世のものと思われる。

本調査区の南側で先に実施された都地遺跡3次調査では古墳時代の掘立柱建物と溝、中世以降の土壙墓・溝・ピットなどが検出されているが、当4次調査の成果とあわせ見れば、中世末の都地城址を乗せる台地状に古墳時代～近世にわたって散漫に集落が営まれた状況が伺われる。

註1. 福岡県教育委員会『立野遺跡(C地区)』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(8) 1986

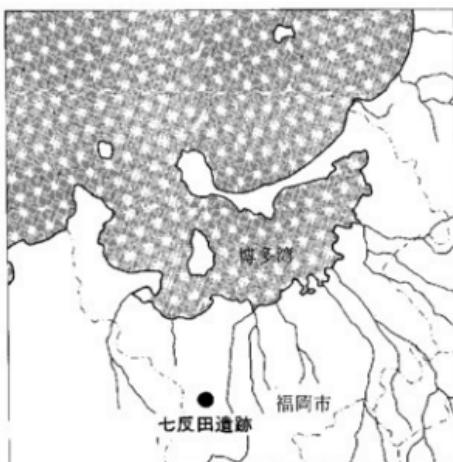
表 都地遺跡4次調査検出遺構一覧

遺構番号	調査区	種類	プラン	法量(m)		時期	主軸方位	挿図	図版
				平面	深さ				
SK-01	I	土坑	円形	φ1.2	0.8	(中世)		5	2
SK-02	I	土坑	隅丸方形	—	0.1	—		5	
SB-03	I	掘立柱建物	2間以上×2間	2.76×—	—		N-45°E	6	2
SB-04	I	掘立柱建物	2間以上×2間	3.48×—	—	(古墳時代)	N-73°W	6	2
SB-05	I	掘立柱建物	2間以上×2間	3.6×—	—	(古墳時代)	N-79°W	6	
SB-06	I	掘立柱建物	3間以上×1間以上	—	—	(古墳時代)	N-14°W	6	
SB-07	I	掘立柱建物	4間×2間	7.57×3.29	—	(古墳時代)	N-72°W	6	2
SB-10	I	掘立柱建物	3間以上×2間以上	—	—	(古墳時代)	N-16°E	6	
SC-11	I	竪穴住居跡	方形	5.2×4.9	0.06	古墳時代		3	2
SB-12	I	圓い	9間×6間	7.33×5.44	—	近世	N-10°E	6	3
SB-13	I	掘立柱建物	2間×2間	2.98×2.95	—	(古墳時代)	N-42°E	7	3
SK-14	I	土坑	円形	φ1.0	0.45	古墳時代		5	
SX-15	I	埋甕	不整円形	0.85×0.65	0.25	近世		5	2
SK-16	I	土坑	椭円形	2×1.2	0.45	近世		5	
SK-18	I	土坑	椭円形	0.9×0.8	0.5	近世		5	2
SK-19	I	土坑	不整椭円形	1.5×0.9	0.1	古墳時代		5	
SK-20	I	土坑	—	—	0.2			5	
SK-21	I	土坑	椭円形	2×1.4	0.55	古墳時代		5	
SK-24	II	土坑	椭円形	1.2×0.45	0.25	古墳時代		5	
SB-27	II	掘立柱建物	2間×2間	3×2.72	—	—	N-40°W	7	3
SB-28	II	掘立柱建物	2間×2間	4.16×3.62	—	—	N-55°E	7	
SB-29	II	掘立柱建物	5間×2間	7.43×3.3	—	(古墳時代)	N-47°W	7	3
SB-30	II	掘立柱建物	2間×2間	2.39×2.16	—	—	N-4°E	7	
SB-31	II	掘立柱建物	6間×3間以上	—×6.27	—	—	N-13°W	7	
SB-32	II	掘立柱建物	5間×3間	4.46×3.08	—	—	N-43°W	8	
SB-33	II	掘立柱建物	5間×2間以上	—×4.95	—	—	N-14°W	8	
SB-34	II	掘立柱建物	3間×2間以上	—×2.88	—	—	N-8°W	8	
SB-35	II	掘立柱建物	3間×3間	3.61×3.19	—	—	N-69°E	8	
SB-36	II	掘立柱建物	2間×1間	2.76×2.2	—	—	N-35°E	8	
SD-37	I～II	小河川	—	—	0.9	古代～現代		付	

()は遺物が少なく、時期が明確でないもの

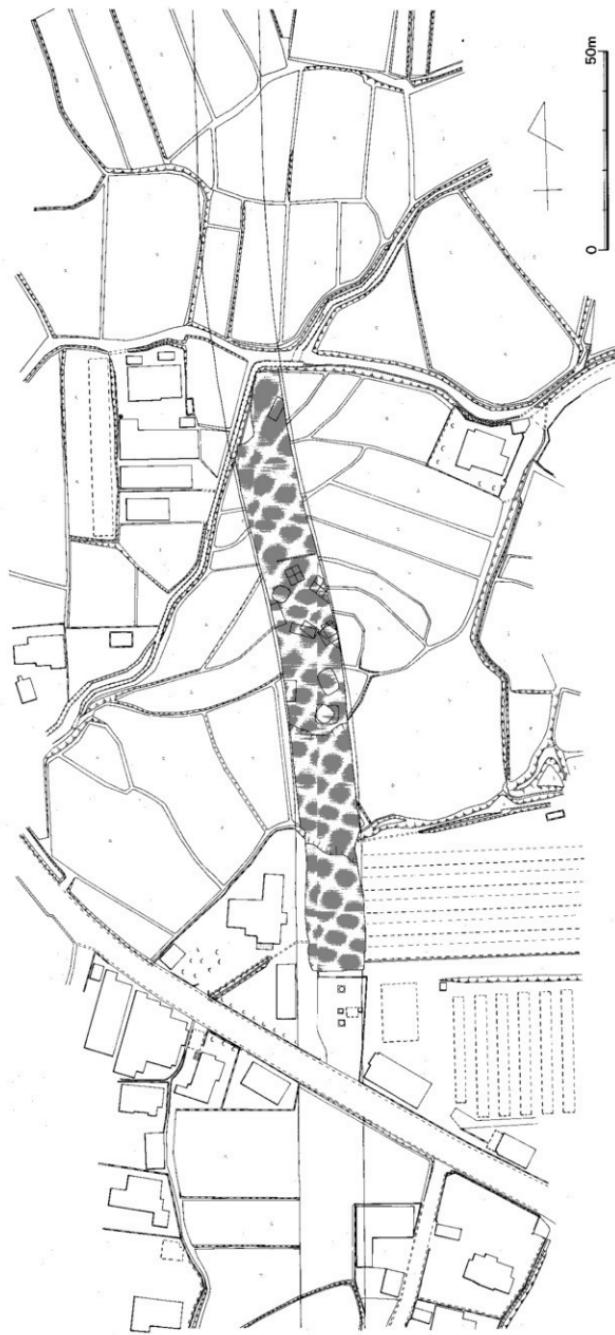
なな たん だ
七 反 田 遺 跡

福岡市西区大字吉武所在遺跡の調査



遺 蹤 略 号 NTD
遺 蹤 調 査 番 号 8659

第11圖 精細調查地圖範例圖 (1/1000)



IV. 七反田遺跡

1 発掘調査の概要

調査は都地遺跡と同年度の12月25日より開始した。調査区は、台地毎に旧養鶏場敷地内をI区、それより北をII区とした。道路面積は、I区が約16m×50mの800m²、II区が約16m×120mの1920m²で、その内発掘調査面積は、I区525m²、II区1620m²である。工事の工程との関係で、II区から先に開始し、翌年の2月8日でII区の調査を終了させ工事が着手された。多数の作業員を投入し、短期間で調査を終了する結果となった。引き続きI区の調査に入った。3月1日からは、吉武遺跡の調査も並行して行い、I区の調査は、3月15日に終了した。

II区の現状は、水田で、遺構面は水田床土のすぐ下から確認され、後世の削平により、遺物包含層、I区表面は検出された遺構の各時期を通して残存しておらず、6世紀後半代の堅穴式住居跡の残存する壁の高さは、25cm前後で、12世紀前半代の上塙墓の深さは、20cmを測るにとどまる。柱穴・ピット状遺構は多数検出されたが、堅穴式住居、掘立柱建物の床面が失われたものに伴うものも多数推定され、建物としてまとめることができなかった柱穴・ピット状遺構は多数である。台地と台地の間、I区とII区の間では、旧河川が検出された。8世紀中頃には、その大半は埋没している。I区の現況は宅地で、道路建設用地として、買収されるまでは、養鶏場の鶏舎が建てられていた。遺構面は宅造に伴う客土、水田、床土の下面に、10~11世紀代の遺物包含層、6世紀前半の遺物包含層が確認された。平安期遺物包含層の下面では、製鉄関係遺構を検出した。遺構面の残存はII区より良好であるが、鶏舎の基礎・排水溝・污水溝等によって、大きく攪乱を受けていた。攪乱部のコンクリート除去には多大の労を要した。

当調査で検出した遺構は、堅穴式住居跡4棟、掘立柱建物12棟、土塙墓1基、土塙11基、河川1、製鉄関係遺構5基、多数の柱穴・ピット状遺構であるが、遺構検出の際に土塙として遺物を取り上げた中には、その後の検討の結果、遺物包含層・二次堆積層の産みや攪乱であったため、検出遺構の項での記述は行わず、出土遺物についてのみ行う。近代の水田に伴う暗渠、水路、段落ちがあったが、全体図の中に図示するのみとし記述は行わない。

2 遺構と遺物

(1) 検出遺構

堅穴式住居跡

SB04(第13図、図版8)

N-29°-Wに方位をとる隅丸長方形の住居跡である。東西の長さ4.2m、南北の長さ6.0を測る。後世の削平が著しく、残存する壁の高さは北側壁で6cmを測る。竈は北側壁中央に設けられている。床面では20個のビットが検出されたが、このうちPit 5、9、31、38の4個が主柱穴を形成すると考えられる。柱穴間の心々距離はPit 5～Pit 9間1.7m、Pit 9～Pit 31間2.8m、Pit 31～Pit 38間2.0m、Pit 5～Pit 38間2.8mを測る。貼床はみられなかった。

覆土から須恵器杯蓋(第25図2)・土師器甕(第25図1)、竈から土師器甕(覆土出土のものと接合)が出土した。

SB11a(第12図、図版8)

ほぼ真北に方位をとる隅丸長方形の住居跡である。東西の長さ5.8m、南北の長さ5.6mを測る。後世の削平が著しく、残存する壁の高さは南側壁で28cm、東側壁で10cmを測る。竈は西側壁北西よりに設けられているが、SB 1 1bを掘り込む際破壊され、側石に用いられていたとみられる礫が散在し、黄色粘土が一部残るのみである。床面では9個のビットが検出されたが、このうちPit 301、302、305、308の4個が主柱穴を形成すると考えられる。柱穴間の心々距離はPit 301～Pit 302間1.7m、Pit 301～Pit 305間1.6m、Pit 305～Pit 308間1.7m、Pit 308～Pit 302間1.8mを測る。貼床はみられなかった。

SB11b(第13図、図版8)

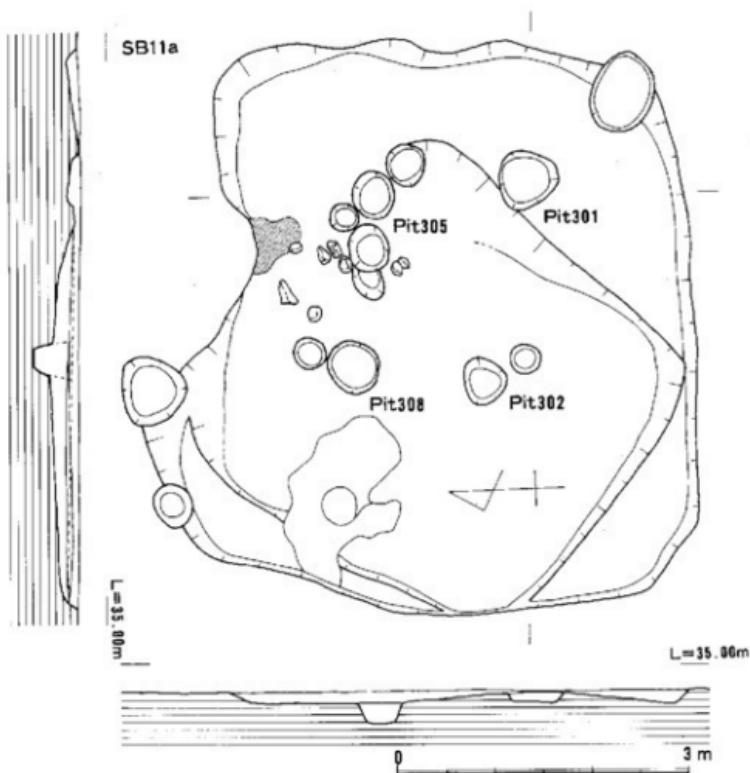
N-45°-Eに方位をとる隅丸長方形の住居跡である。東西の長さ4.0m、南北の長さ4.3を測る。後世の削平が著しく、残存する壁の高さは西側壁で22cm、南側壁で18cmを測る。竈は西側壁中央に設けられている。黄色粘土で塗られた竈には、側石に用いられていたとみかかられる礫がわずかに残り、中央部は赤く焼けている。床面では9個のビットが検出されたが、このうち主柱穴を形成すると考えられるビットは確認されなかった。貼床はみられなかった。

遺物は、床面より浮いた状態で出土し、SB11aに伴う遺物が搅乱され混入することは十分考えられたが、遺物の時期に明確な差は認められず、分離して取り上げることはできなかった。

SB15(第14図、図版9)

N-30°-Eに方位をとる隅丸長方形の住居跡である。東西の長さ4.1m、南北の長さ3.7を測る。後世の削平が著しく、残存する壁の高さは西側壁で10cm、南側壁で8cmを測る。竈は西側壁中央部に設けられているが、わずかに痕跡をとどめるのみである。床面では15個のビットが検出されたが、このうちPit 403、1、409、2の4個が主柱穴を形成すると考えられる。柱穴間の心々距離はPit 403～Pit 1間1.8m、Pit 1～Pit 409間2.0m、Pit 409～Pit 2間1.8m、Pit 2～Pit 403間2.0mを測る。貼床はみられなかった。

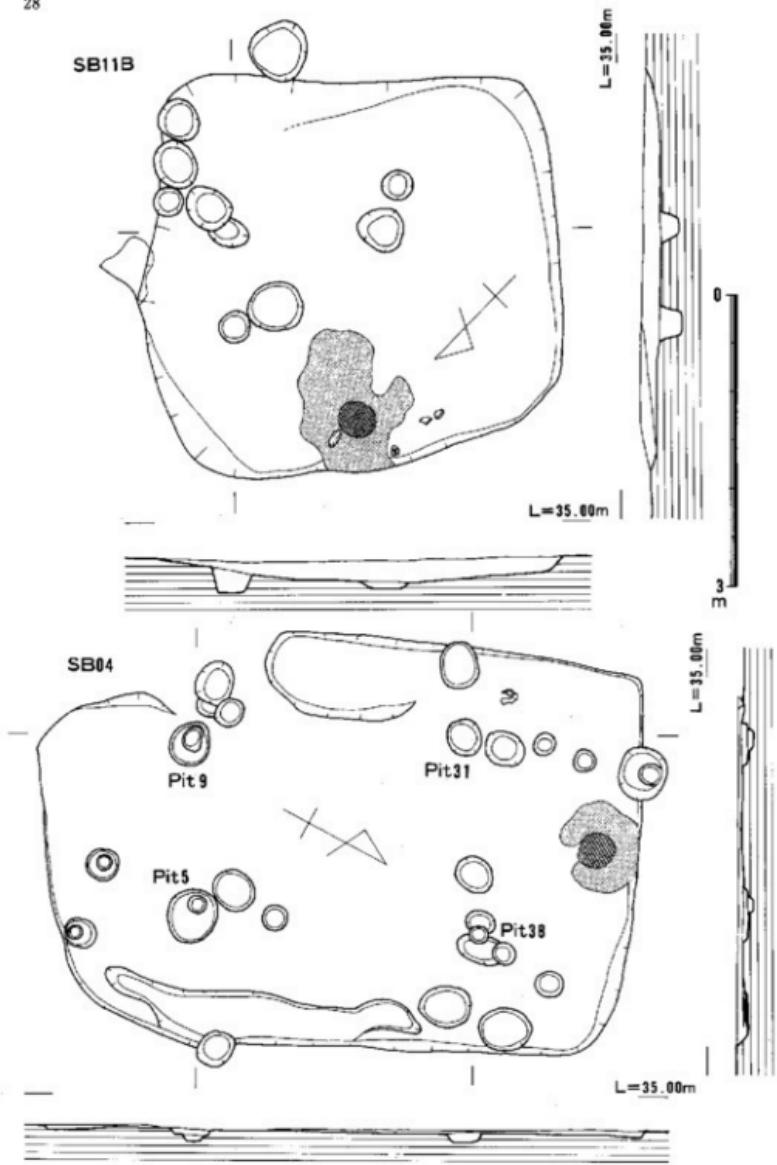
覆土から、須恵器杯蓋・身片・土師器甕口縁部片が出土した。



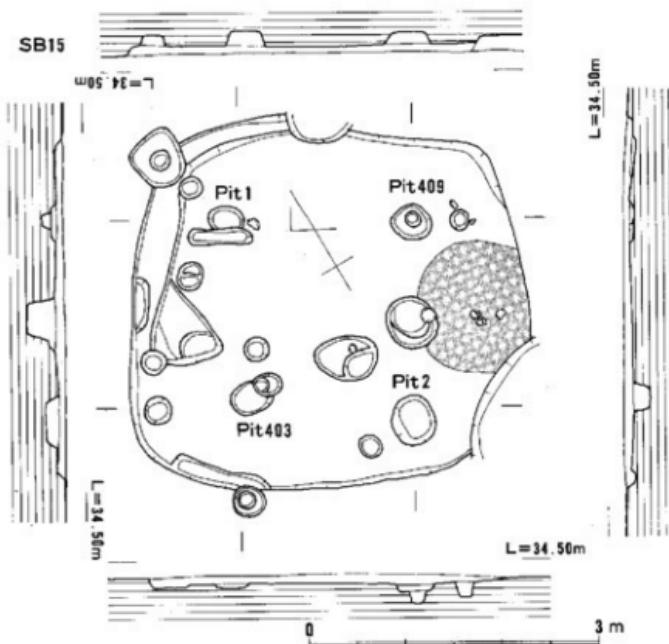
第12図 壁穴住居跡実測図 (1) (1/60)

第2表 壁穴住居跡一覧表

番号	遺構番号	規 模 (たて×よこ)	面積	主柱穴	遺 物	時期	切り合 い 関 係
1	SB04	6.0m × 4.2m	25.2m ²	4 本	土師器甕・須恵器杯身	6世紀	
2	SB11a	5.8m × 5.6m	32.5m ²	4 本		6世紀	SB11bに切られる
3	SB11b	4.3m × 4.0m	15.9m ²			6世紀	SB11aを切る
4	SB15	4.1m × 3.7m	15.2m ²	4 本	土師器甕口縁部片・須恵器杯蓋身片	6世紀	



第13図 竪穴住居跡実測図 (2) (1/60)



第14図 穂穴住居跡実測図 (3) (1/60)

獨立柱建物

SB40 (第15図、図版7)

梁間1間、桁行4間以上の南北棟の建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長5.5mを測る。柱穴はほぼ円形で、径50~60cm、深さ12~30cmを測る。北側は調査区外に延びる。方位はN-2°-Eにとる。柱穴から時期を示す遺物の出土はない。

SB41 (第15図)

梁間2間、桁行2間の南北棟、純柱の建物である。梁間の全長3.8m、桁行の全長4.0mを測る。柱穴はほぼ円形で、径40~60cm、深さ13~40cmを測る。方位はN-24°-Wにとる。柱穴からは、須恵器杯蓋片が出土している。

SB42 (第15図、図版7)

梁間1間、桁行2間の棟方向を北東から南西にとる建物である。梁間の全長2.2m、桁行の全長4.7mを測る。柱穴はほぼ円形で、径40~70cm、深さ30~50cmを測る。方位はN-50°-Eにとる。柱穴から時期を示す遺物の出土はない。北東隅の柱穴が切られる。

SB43（第15図、図版7）

梁間1間、桁行2間以上の棟方向を北西から南東にとる建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長7.4m以上を測る。柱穴はほぼ円形で、径30~60cm、深さ10~40cmを測る。北西側は調査区外に延びる。方位はN-48°-Wにとる。柱穴からは、須恵器杯身片が出土している。

SB44（第16図、図版7）

梁間2間、桁行3間以上の棟方向を北西から南東にとる総柱の建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長4.0m以上を測る。柱穴はほぼ円形で、径30~50cm、深さ10~26cmを測る。北東側は調査区外に延びる。方位はN-49°-Wにとる。柱穴からは、弥生土器口縁部片（後期）、鐵造鉄斧が出土している。

SB45（第16図）

梁間1間以上、桁行3間以上の南北棟の建物である。梁間の全長2.0以上、桁行の全長6.0m以上を測る。柱穴はほぼ円形で、径40~70cm、深さ5~18cmを測り、南東隅の柱穴は根石を持つ。西側は調査区外に延びる。方位はN-17°-Wにとる。柱穴からは、須恵器杯蓋片が出土している。

SB46（第16図、図版7）

梁間1間、桁行2間の東西棟の建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長6.4mを測る。柱穴は小判形で、長径90~140cm、短径40~70cm、深さ8~46cmを測る。方位はN-17°-Wにとる。柱穴からは弥生土器底部片（第27図20）・口縁部片（後期）が出土している。

SB47（第16図、図版7）

梁間1間、桁行2間の棟方向を北西から南東にとる建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長4.4mを測る。柱穴は小判形または円形で、長径70~110cm、短径50~80cm、深さ10~36cmを測る。方位はN-54°-Wにとる。柱穴から時期を示す遺物の出土はない。

SB48（第17図、図版7）

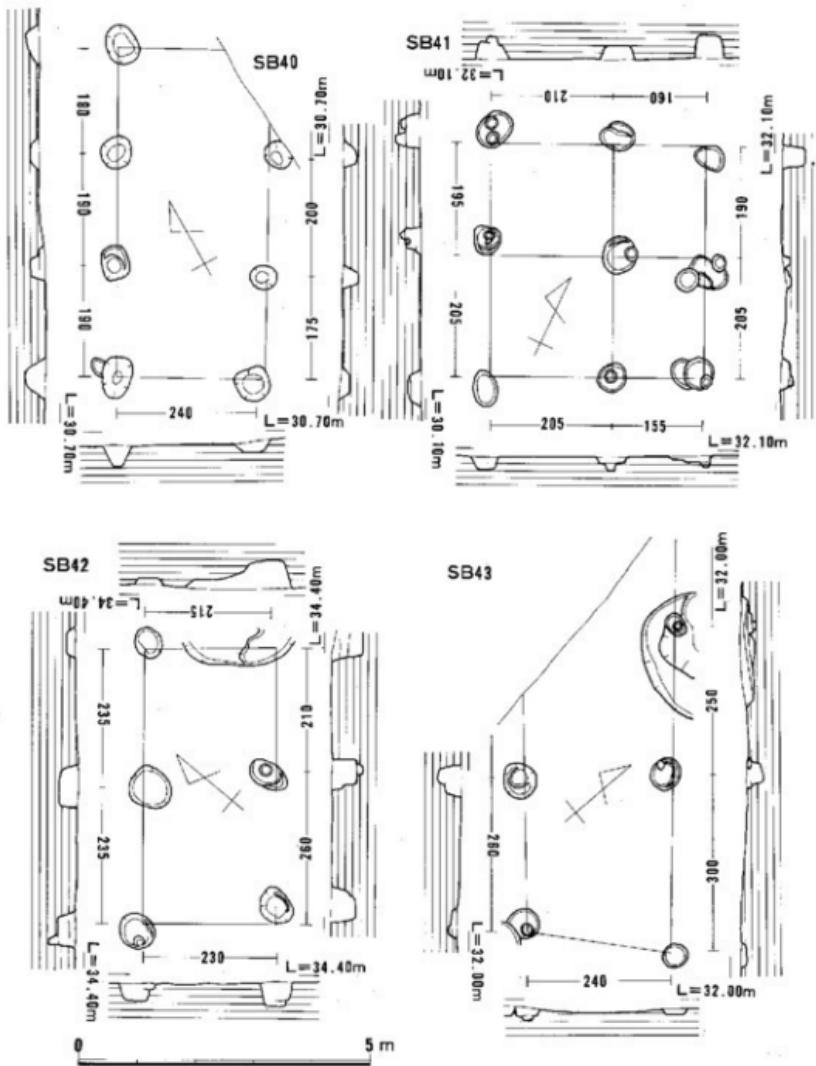
梁間2間、桁行2間の南北棟の建物である。梁間の全長2.6m、桁行の全長3.5mを測る。柱穴は円形で、径30~70cm、深さ5~26cmを測る。南東隅の柱穴は調査区外にはずれる。方位はN-27°-Wにとる。柱穴からは、土師器楕口縁片等が出土している。

SB49（第19図、図版7）

梁間2間、桁行2間以上の棟方位を北西から南東にとる建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長6.2m以上を測る。柱穴は円形で、径30~45cm、深さ10~26cmを測る。南東側は調査区外に延びる。方位はN-42°-Wにとる。柱穴からは、須恵器杯口縁部片が出土している。

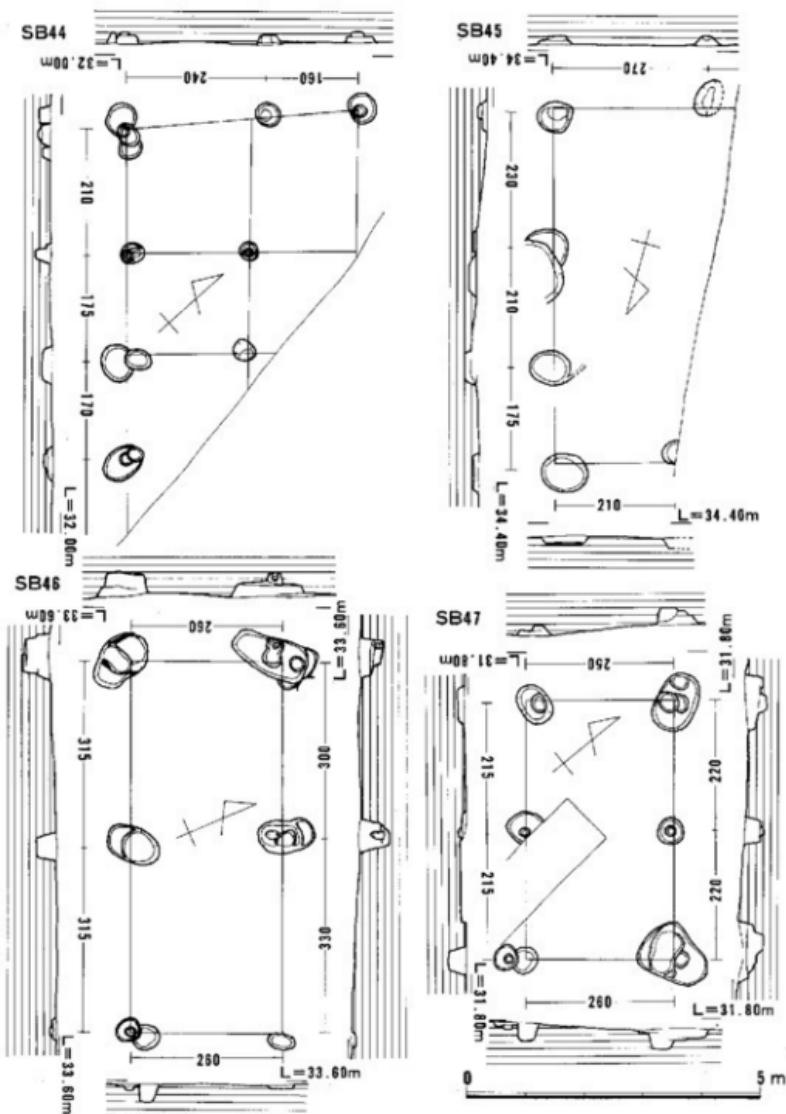
SB50（第17図、図版7）

梁間2間、桁行2間以上の東西棟の建物である。梁間の全長4.0m、桁行の全長5.0mを測る。柱穴は円形で、径24~60cm、深さ10~20cmを測る。東側は調査区外に延びる。方位はN-62°-

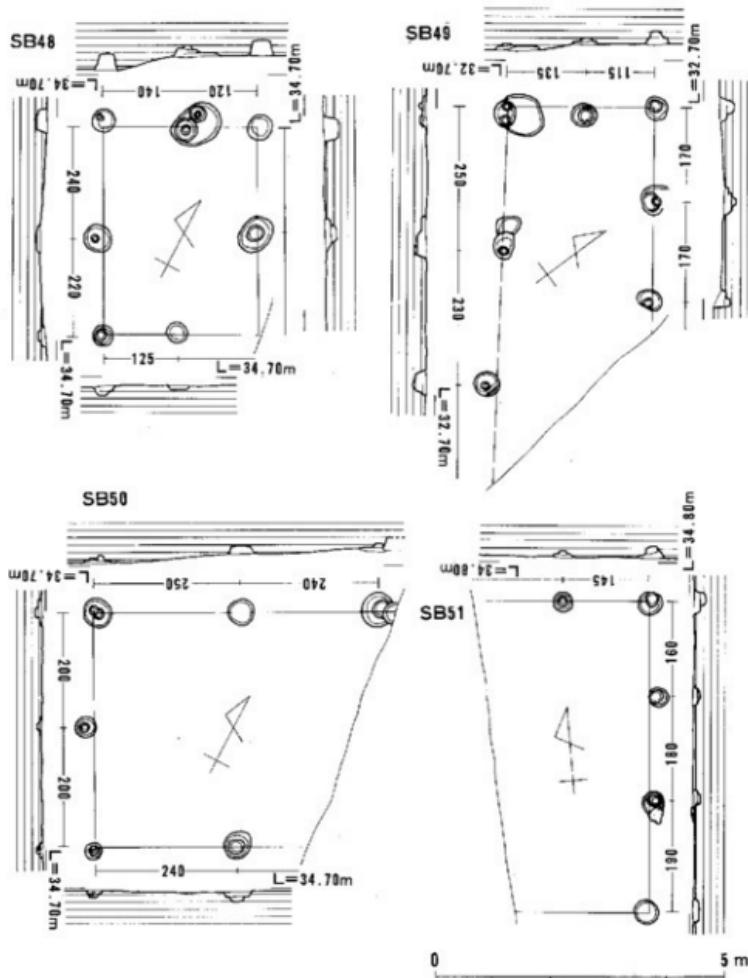


第15図 掘立柱建物実測図 (1) (1/100)

Eにとる。柱穴からは、須恵器口縁部片が出土している。



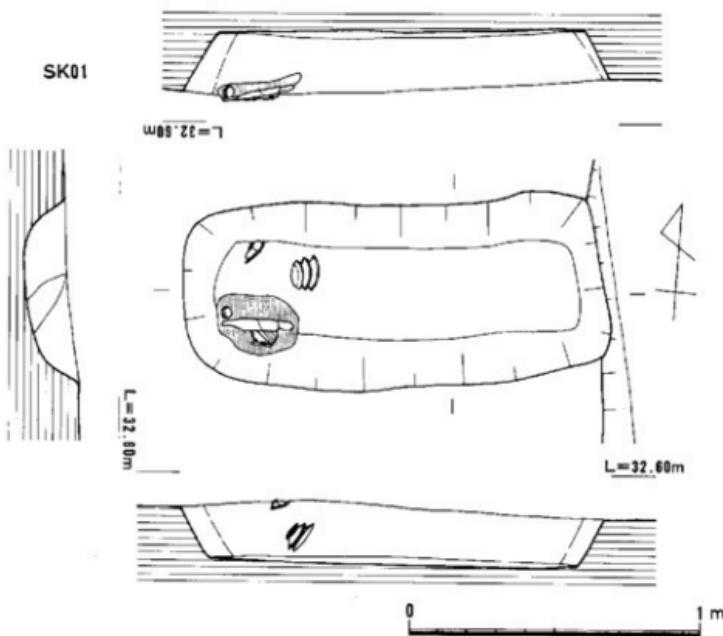
第16図 摂立柱建物実測図 (2) (1/100)



第17図 据立柱建物実測図 (3) (1/100)

SB51 (第17図)

梁間2間以上、桁行3間の南北棟の建物である。梁間の全長3.0m以上、桁行の全長5.3mを測る。柱穴は円形で、径30~40cm、深さ12~40cmを測る。西側は調査区外に延びる。方位はN-9°-Eにとる。柱穴からは、須恵器頸部片が出土している。

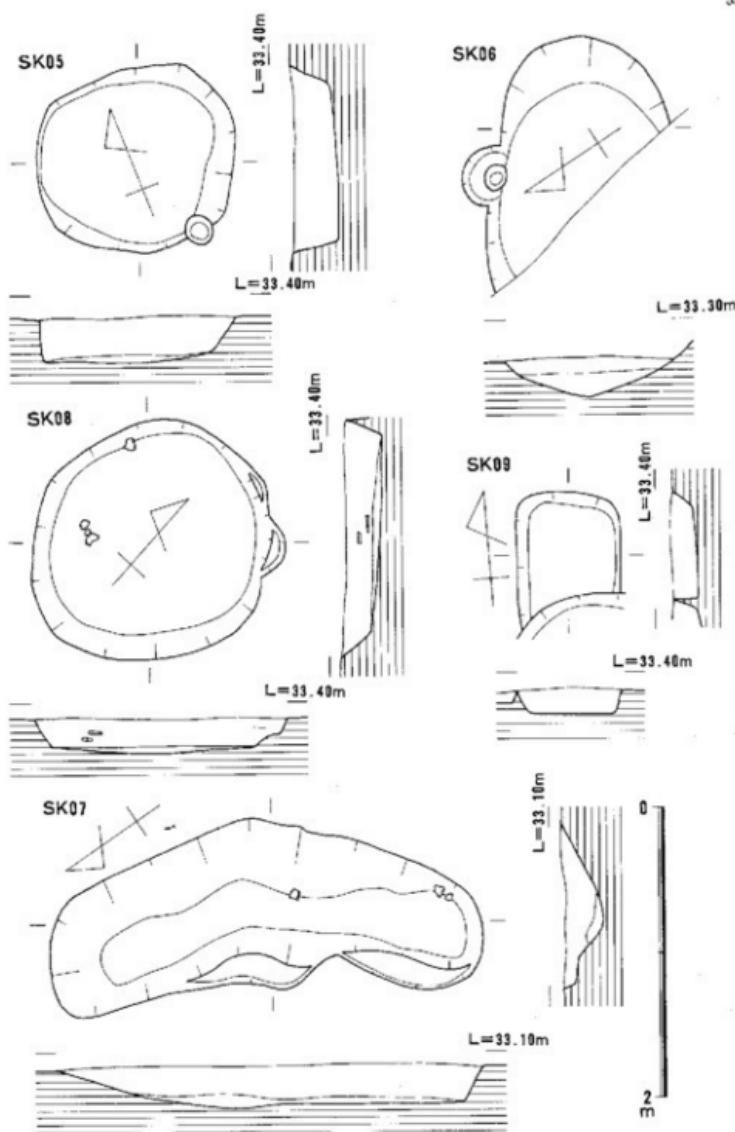


第18図 土壙墓実測図 (1/20)

土壙墓

SK01(第18図、図版12)

平面形は東西に長い隣九方形を呈し、全長1.4m、幅60cm、残存する深さは20cmを測る。主軸の方位はN-84°-Eにとる。堀方の南西隅には、赤褐色で周囲の覆土より堅くしまった土が、長さ28cm、幅20cmの不整方形の範囲に薄くひろがっていた。そのひろがりに接して、青白磁合子、木製の鞘に納められた小刀、漆塗りの木箱に納められた和鏡が副葬されていた。そこから北へ15cmのところで、毛抜きが底面より15cm浮いた状態で出土しているその束10cmでは、白磁小椀1、白磁皿1、土師器小皿1が底面から5cm浮いた状態で出土した。赤褐色の不整方形のひろがりは、木箱(化粧箱)の痕跡とみられ、南西から北東に向って傾いている。傾きの方向で、毛抜き、白磁、土師器が出土していることから、それらの遺物は、もともと木箱に納められていたが、木箱、遺体の腐朽等により原位置から移動したと考えられる。板材、もしくはその痕跡、鉄釘はみられなかった。



第19図 土壌実測図 (1) (1/40)

土壤

SK05(第19図)

平面形は円形を呈し、直径1.3m、深さは中央部で32cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。須恵器壺洞部片(外面平行叩き、内面青海波状文)が出土している。

SK06(第19図)

平面形はほぼ橢円形を呈し、南西側は調査区外に延びる。全長1.5m以上、幅1.1m、深さは中央部で28cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位はN-34°-Wにとる。

須恵器杯蓋口縁部片(III B)が出土している。

SK08(第19図)

平面形は円形を呈し、直径1.6m、深さは中央部で28cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位N-40°-Wにとる。

須恵器杯蓋口縁部片(8世紀前半代)・甕(外面擬格子叩き、内面青海波状文)が出土している。

SK09(第19図)

平面形は隅丸長方形を呈し、南側がSK08に切られる。残存長0.7m、幅0.7m、深さ17cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位はN-85°-Wにとる。

須恵器杯片が出土している。

SK07(第19図)

平面形は南北に長い不整長方形を呈し、全長2.9m、幅1.2m、深さは中心部で25cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。

須恵器杯身・高杯片(III B)が出土している。

SK10(第20図)

平面形は南北に長い長方形を呈し、全長1.6m、幅0.7m、深さは中心部で17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。方位はN-72°-Wにとる。

須恵器杯蓋片が出土している。

SK12(第20図)

平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、東側をSB11bに切られる。全長68cm、幅1.25m、深さは中央部で12cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。方位は真北にとる。

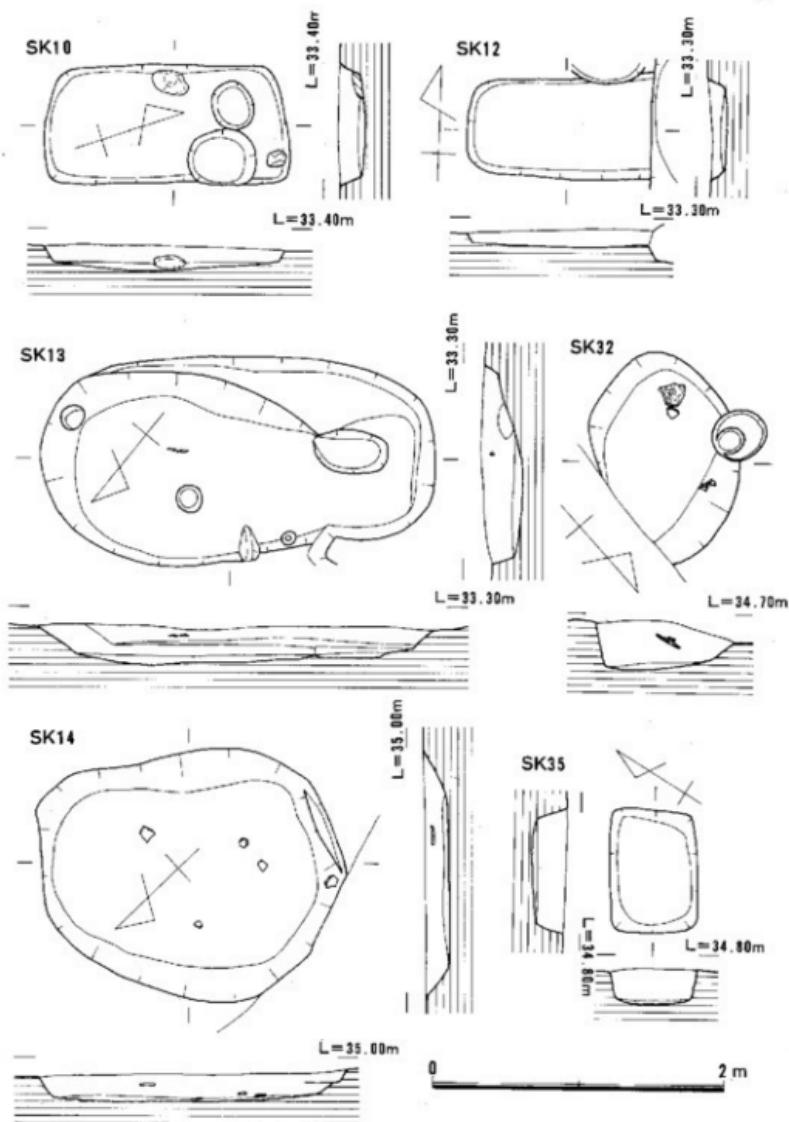
SK13(第20図)

平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、全長2.7m、幅1.4m、深さは中心部で28cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位はN-50°-Eにとる。

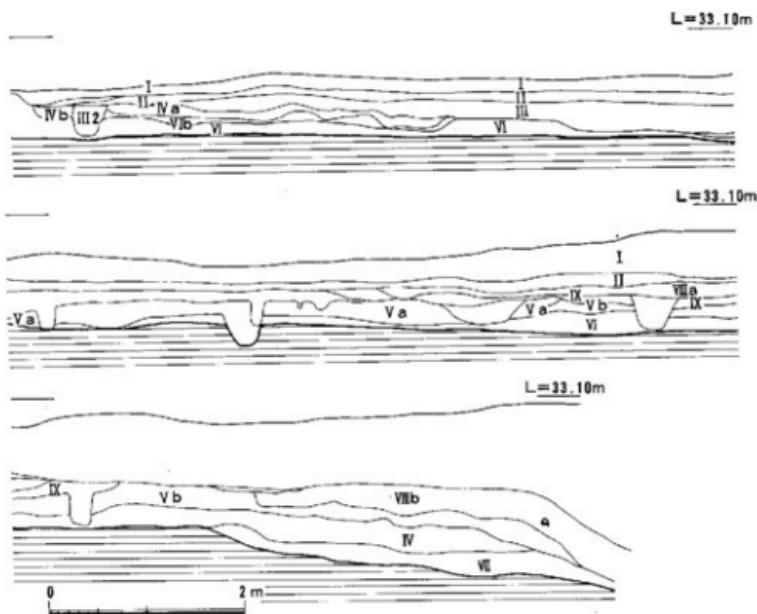
須恵器杯身片(IV)・土師器瓶片が出土している。

SK32(第20図)

平面形は南北に長い橢円形を呈し、東側は攪乱を受けている。全長1.5m、幅1.0m、深さは



第20図 土壤実測図 (2) (1/40)



第21図 1区西壁土層実測図 (1/60)

中心部で35cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。方位はN-40°-Eにとる。

土師器甕口縁部片、須恵器甕口縁部片が出土した。

SK34(第20図)

平面形は南北に長い橢円形を呈し、全長2.1m、幅1.7m、深さは中心部で18cmを測る。

壁は斜めに立ち上がる。方位はN-133°-Eにとる。

土師器甕胴部片が出土した。

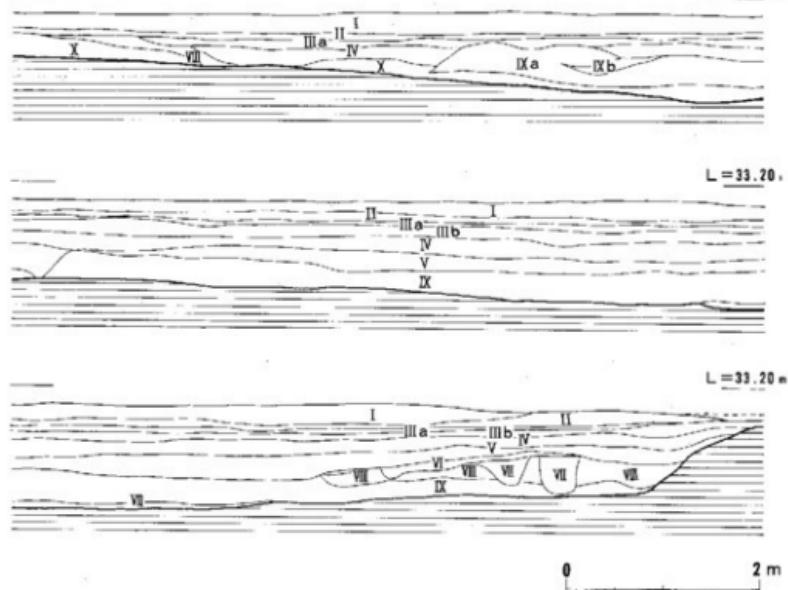
SK35(第20図、図版9)

平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、全長84cm、幅60cm、深さは中央部で23cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。方位はN-60°-Eをとる。覆土はSD02IV層と同じ灰色弱粘質土で、瓦器楕片が出土した。

河川

SD02(図版6)

台地と台地の間、I区とII区の間で検出した。調査区内を横断するかたちで、湾曲しながら東流する。8世紀中頃までにはその大半は埋没しており、幅約30m、深さ0.7mを測る。

L = 33.20 m

第22図 II区西壁土層実測図 (1/60)

I区土層(第21図、図版6)

I層は暗灰色土(宅地造成に伴う耕作土混じりの客土)、II層は黄灰色土(水田床土)、III層は灰色弱粘質土(平安時代包含層)、IVa層は暗灰色弱粘質土(木炭・焼土混じり)、IVbb層は灰色粘質土(赤褐色土混じり)で、IVa・IVb層はSK31の埋土に相当する。Va層は暗黄灰色弱粘質土、Vb層は淡黄灰色弱粘質土で、Va・Vb層は古墳時代(II~IIIa期)包含層、IV層は赤褐色粘質土、VII層は赤~黄褐色粘質土、VIIa層・VIIb層は暗灰褐色粘質土(木炭・炉体・鉄滓混じり)、IX層は淡黄褐色弱粘質土である。

II区土層(第22図、図版6)

I層は暗灰色土(現水田耕作土)、II層は灰色土(旧水田耕作土)、IIIa層は黄灰色弱粘質土(水田床土)、IIIb層は淡黄灰色土(水田床土)、IV層は灰色弱粘質土で、北宋錢・上鍤が出土したのみである。V層は暗灰色弱粘質土(砂礫混じり)で、この層より下位で6世紀から8世紀にかけての遺物桃種(図版19)がまとまって出土した。VI層は砂礫層(鉄滓混じり)、VIIは黒色土ブロック、VIII層は灰色砂状土で滑石製有孔円板がこの層位から出土している。IX層は砂礫層(黒色土混じり)で、上面で土器・木製品が密着した状態で出土している。X層は白色砂礫層で上面に白

色砂・鉄滓の混入がみられるのみで、地山と考えられる。XIIa層は灰色細砂(鉄分を含む。)師、XIIb層は灰色粘質土ブロックで、水流による堆積である。XII層は青灰色粘質土で、遺物は全くみられず地山と考えられる。

台地部の地山は青灰色砂状土である。

製鉄関連遺構

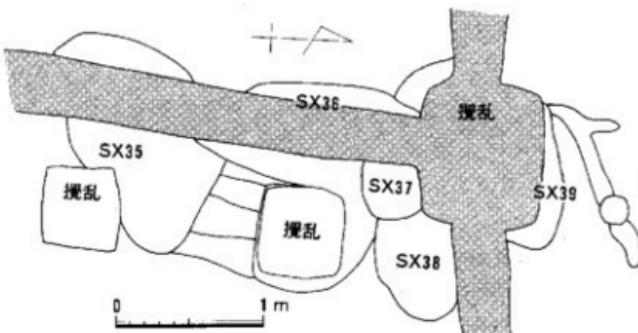
旧河川SD02の南岸の包含層上面を中心に計5基検出した。近年まで使用されていた鶏舎の基礎、排水、污水井等により、大きく搅乱を受け、遺存状態は極めて悪い。出土した鉄滓の分析は、諸般の事情により掲載できなかった。

SX35(第24図、図版11)

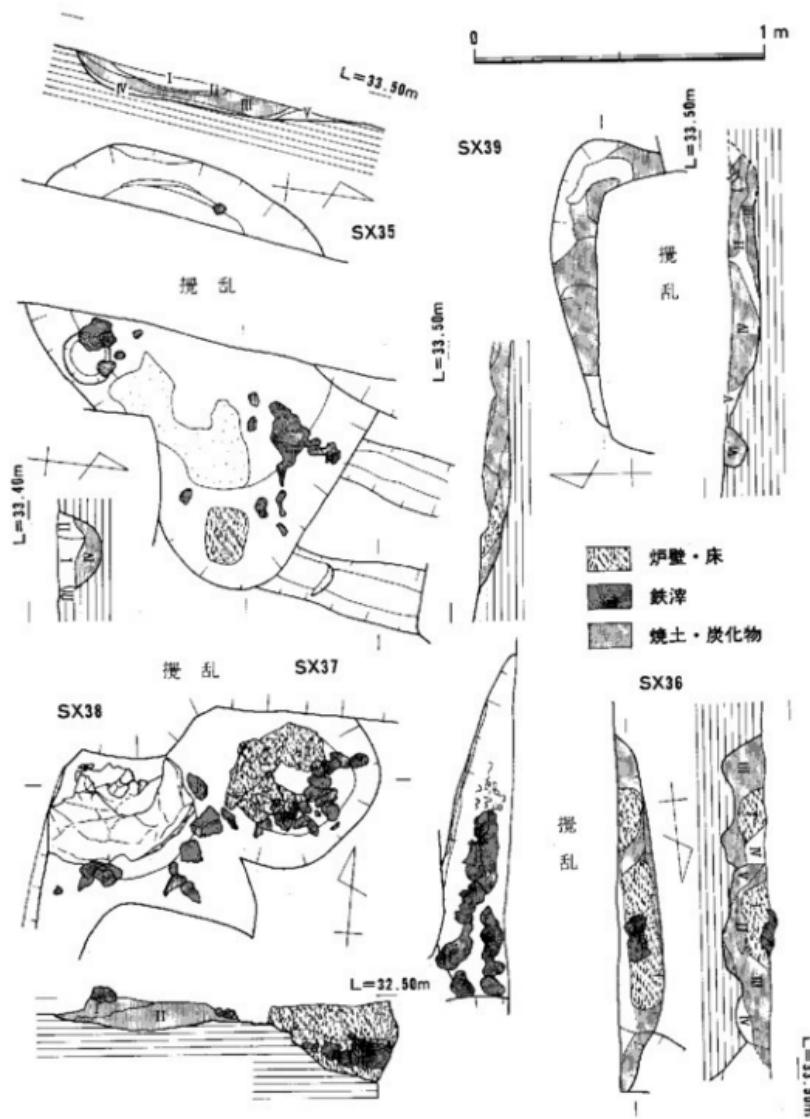
平面形は南北に長い不整橢円形を呈し、排水溝によって南北に幅40cmの搅乱を受けている。全長1.4m、幅0.9m、深さ8cmを測る。南北に切った土層の断面をみると、I、黒灰色層、II、暗橙色焼土層、III、暗青灰土層(I~IIIは炭化物を含む。)、IV、黄色~橙色焼土層の堆積となり、土壙内で2度の焼成がなされたと考えられる。搅乱より東の東西方向の土層の断面では、I、黄色焼土層、II、黒褐色弱粘質土層(鉄滓、木炭混り)、III、黒褐色弱粘質土層(炉壁塊を含む)。IV、暗灰褐色粘質土層(木炭混り)と堆積し、炉の本体は東寄りであったと考えられる。北側から幅30cm、深さ15cmの溝2条が延びるが、鶏舎基礎に搅乱されその性格については不明である。溝から須恵器杯が出土している。東西方向の土層断面をみると、I、暗黒灰色弱粘質土層(鉄滓混り)、II、灰褐色灰状土層、III、赤褐色粘質土層、IV、暗黄褐色土層(木炭混り)と堆積する。

SX36(第24図、図版11)

平面形は南北に長い橢円形を呈し、排水溝によって南北に幅40cmの搅乱があり、東西に分断



第23図 製鉄関連遺構配置図 (1/40)



第24図 製鉄関係造構実測図 (1/20)

される。全長1.2m、幅0.7m、深さ20cmを測り、SX35を切りSX37・38に切られる。南北に切った土層の断面をみると、I、暗茶褐色土層(鉄分・炉壁片を含む)、II暗青灰色土層(鉄分・木炭混り)、III、暗赤褐色土層(木炭・炉壁片混り)、IV、暗黒褐色弱粘質土層、V、橙色粘質土層(木炭混り)と堆積する。2基が重複している可能性がある。

SX37(第24図、図版10・11)

汚水槽の南側に断片的に鉄滓・炉壁・床が残存する。SX36・38を切る。

SX38(第24図、図版10・11)

SX36を切り、SX37に切られる。北側は汚水槽、排水溝によって攪乱を受けている。全長0.72m以上、幅0.54m以上、深さ12cmを測る。東西に切った上層の断面をみると、鉄滓の下に、I、焼土層、II、黒灰色土弱粘質土層(木炭・鉄滓混り)と続く。

SX39(第24図、図版11)

汚水槽により本体のほとんどが失われ、北辺の一部が残存するのみである。東西に切った土層の断面をみると、I、暗灰褐色弱粘質土層(木炭混り)、II、暗灰褐色弱粘質土層(黄灰色土混り)、III、黒灰色の炭化物層、IV、黒灰色粘質土層(木炭混り)、IV'、IVと同じ(構状遺構埋土)、V、暗黃灰色土層が堆積する。深さ15cmを測る。

2 出土遺物

竪穴住居跡出土遺物

SB04出土遺物(第25図、図版15・16)

土師器壺(1) 口縁部は直線的に立ち上り、端部がわずかに外反し、口縁部内面の稜は不明瞭である。口径は胴部最大径より小さく、胴部は丸味をもつ。調整は口縁部が横ナデ、胴部は外面が刷毛目、内面はヘラ削りされる。

須恵器杯壺(2) 口径14.3cm、器高4.4cmを測る。天井部と口縁部の境は凹窓し、口縁端部は丸くおさめられる。焼成はややあまく、瓦質に近い。

SB11出土遺物(第25図、図版15・16)

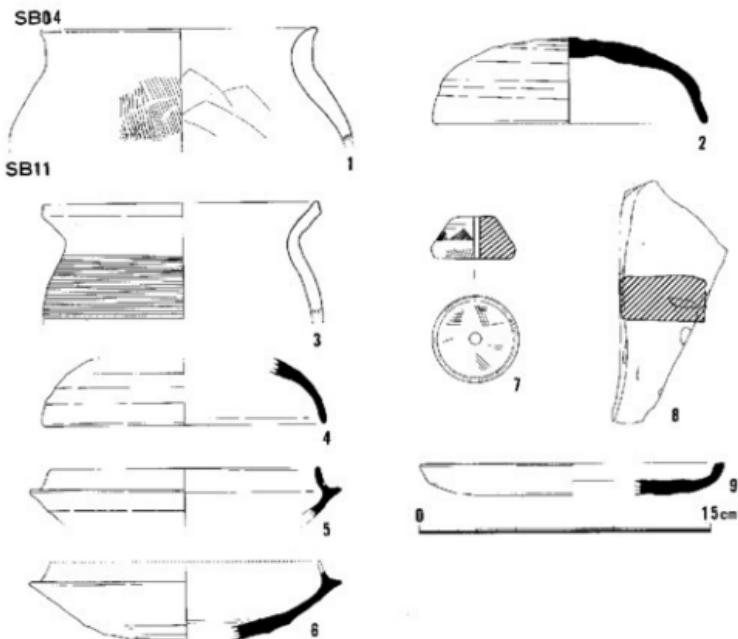
土師器壺(3) 口縁端部のつくりは須恵器的で調整は口縁部が横ナデ、残存する胴部の上半はカキ目が施される。胎上には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

須恵器

杯(4~6) 4は蓋で、天井部と口縁部の境は丸くつくられ、段、沈線はみられない。口縁端部は丸くつくられ、内面に沈線状の段がつく。5の立ち上りの高さは1.1cmで短く内傾し、端部は丸くつくられている。

高杯(9) 浅い杯部の破片で口縁端部は平坦で、水平である。8世紀中頃のもので、他からの混入であろう。

滑石製紡錘車(7) 高さ2.2cm、上径2.2cm、下径3.8cmの截頭円錐形の紡錘車である。側面お



第25図 壁穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

および下面是圓線の中に鋸歯文が施される。

砥石(8) 砂岩製で現存する3面は、砥ぎ面として使用されている。

柱穴・ピット状遺構出土遺物(第26・27図、図版15~16)

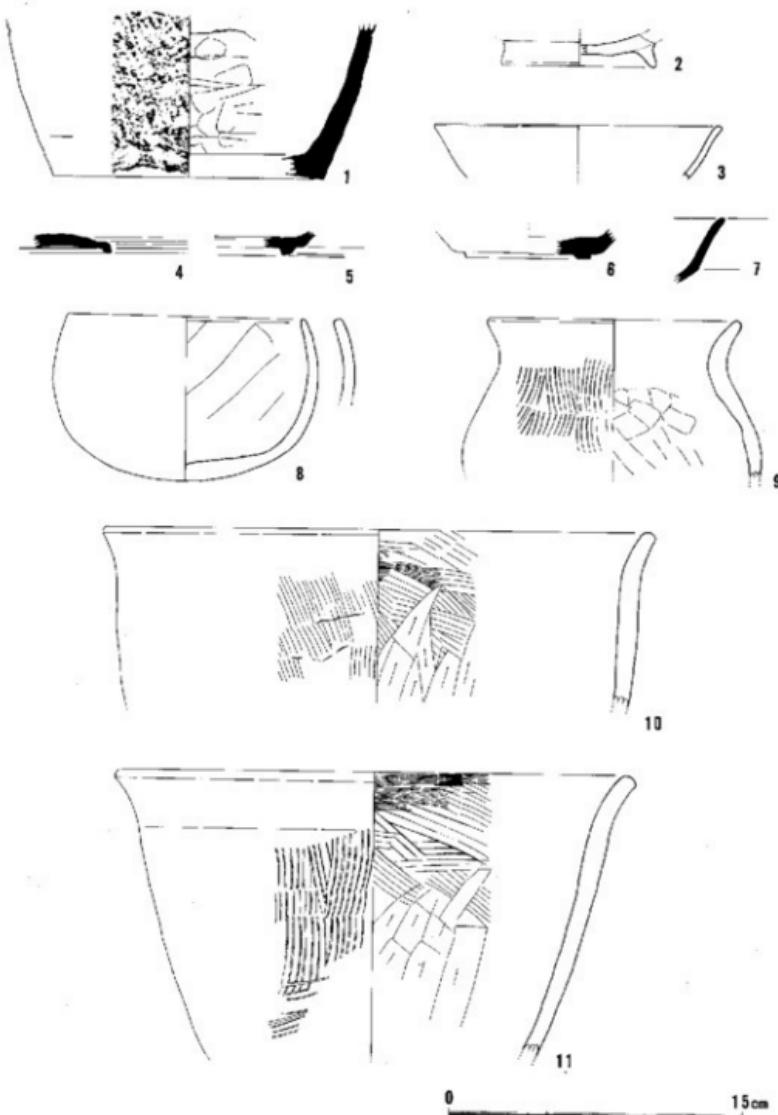
内黒土器

椀(2・3) 1は外下方に開く高台を貼りつけた底部片(Pit440出土)、2は丸味をもつ体部に外反する口縁部の破片資料(Pit550出土)で、いずれも外面は横ナデ、内面はヘラ削きが施される。

須恵器

壺(1) 外面は格子目印き、部分的にナデ消し、底部より3cm上の部位は横方向にヘラ削り、底部との境付近は木口で横方向にナデを施している。内面はヘラナデ、指頭圧痕が残り、粘土紐の縫ぎ目がみられる。胎上には細かい白色砂粒を含み、青灰色を呈する。Pit440出土で、2と共に伴する。外底部には植物繊維のH痕がみられる。

調整は、口縁部外面が横ナデ、内面は刷毛目、胴部外面が刷毛目、内面はヘラ削りされる。



第26図 柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図 (1) (1/3)

10の胸部外面には、粘土紐の巻き目がみられる。10はPit549、11はPit580出土。

杯(4~7) 4は口縁部が体部より外反し、断面の形状は三角形に近い。Pit327出土。5・6は断面四角形を呈する高台が、底端部よりやや内側につく底部片である。5はPit616、6はPit225出土。7は体部中位で稜をもち、内窓から外反へと屈曲してのびる。Pit228出土。

土器

椀(8) 口径12.2cm、器高8.4cmを測る深めの椀である。口縁端部は丸味を帯びた平坦面がつくられ、内傾する。器表が磨滅しており、調整は不明瞭であるが、内面はナデとみられる。胎土には砂粒を多量に含み赤褐色を呈する。Pit569出土。

甌(9~12) 口縁部はゆるやかに外反し、内面の棱は不明瞭である。口径は胸部最大径より小さく、胸部は丸味をもつ。調整は、口縁部が横ナデ、胸部は外面が刷毛目、内面はヘラ削りされる。9はPit379・380、12はPit37出土。

甌(10・11) ほぼ直線的に開く体部にゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は丸味を帯びた平坦面がつくられ、わずかに外傾する。10の方のやや直立する。器周の残存度が1/8前後であるため、把手はみられなかった。

須恵器

杯(13・14・16~18) 13は蓋で天井部と口縁部の境は丸く、沈線はない。口縁端部は丸くつくられる。Pit508出土。14の立ち上りの高さは8mmと短く内傾し、端部は丸くつくられる。Pitも324出土。16は口縁端部内面に沈線状の段がつく。蓋の口縁部分で、Pit37出土。17の立ち上りの高さ13mmで、ほぼ直線的に内傾する。Pit603出土。18は蓋で天井部と口縁部の境に段がつく。口縁端部内面には段がつく。

甌(15) 口縁端部が肥厚し、外面に段をつくる。残存する部分は横ナデ。Pit228出土。

弥生土器

甌(19) 口縁部はくの字状を呈する。口縁部および内面はナデ、胸部外面は刷毛目を施す。Pit560出土。

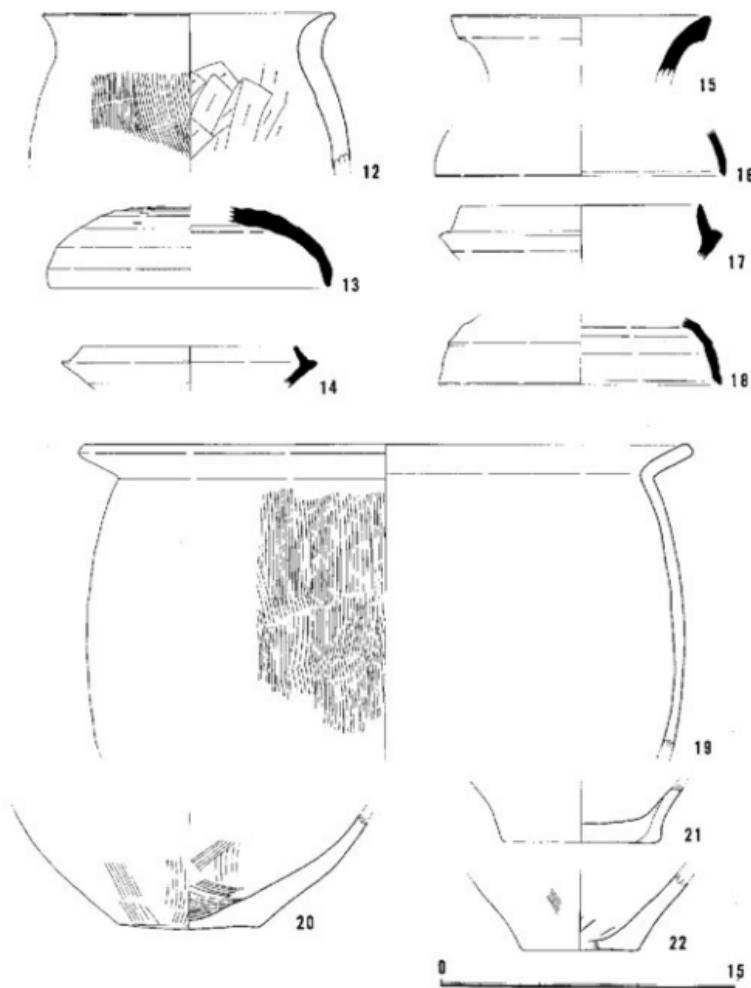
20は丸味を帯びた平底の底部片(SB46出土)、21・22平底の底部片(それぞれPit258・160出土)。

土壤墓SK01出土遺物(第28図、図版18)

土器小皿(1) 底部はヘラ切りで板状压痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径8.9cm、器高1.4cm、底径7.2cmを測る。

白磁

皿(2) 口縁部は外反し、端部は平坦でわずかに外傾する。内底見込みに沈線をもつ。外面は口縁部の近くまでヘラ削りされる。全面施釉の後、外底の釉を削り取っている。胎土は淡灰白色を呈し、空色を帯びた灰白色の釉が施されている。口径10.4cm、器高2.5cm、底径4.1cm



第27図 柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図 (2) (1/3)

を測る。

小碗(3) 口縁部は大きく外反し、高台は細く低い。体部内面中位に沈線を配し、そのなかにへラおよび櫛状工具によって文様を施す。外面は口縁部の近くまで回転へラ削りされる。胎土は淡灰白色を呈し、灰白色の釉が高台までかかり、口縁部外面から垂下している。口径12.2cm、器高4.4cm、高台径3.7cmを測る。

青白磁合子(4) 印籠式の合子で、蓋を被せた状態で出土したが、内藏物はみられなかつた。蓋は天井部と口縁部の境が明瞭でなく、丸く型押ししてつくられる。口縁端部は平坦で、わずかに内傾して切られる。輪花状の外形をなし、天井部にも型押しの文様が施されるようであるが、厚く施釉されているために不明瞭である。胎土は白色を呈し鈍い光沢の灰白色の釉が、外面に施される。口径4.1cm、器高1.4cmを測る。身は蓋受け部の立ち上りの高さ4mmで、短く内傾している。蓋と同様に輪花状に型押ししてつくられる。胎土は蓋と同様の白色を呈し、釉は蓋より透明度が高く、蓋受け部および外底部を除いて施される。口径3.1cm、器高1.8cm、底径4.0cmを測る。

毛抜き(5) 残存する長さ6.4cm、軸5mm、厚さ2mmを測る。先端部は欠失する。茎はついていない。

小刀(6) 切先の一部を欠損する。残存する長さ24.6cmを測る。刀身は残存する長さ12.5cm、最大幅30mm、厚さ6mmを測り、木製鞘が付着して残存していた。茎は長さ6.8cm、最大幅14mm、厚さ3mmを測り、柄が付着して残存しており、目釘穴については不明。

和鏡 萩双鳥鏡(7)

縁が欠損しておりその形状は不明であるが、平安後期によくみられる「L」字状に屈曲する低く薄い縁であろう。内区と外区の界となる圓線(界圈)の断面形は細く低く、径7.4cmを測る。裁頭円錐形の紐の周囲には菊形の低い紐座がつく、鏡胎は薄手で、厚さ1mmを測る。鏡背の文様は界圈にとらわれず、風になびく萩とその空間を飛び舞う二羽の鳥を表わしている。塗りの鏡箱(残存状態はきわめて不良)に納められていたが、鏡背の一部には布が付着している。

土壤出土遺物

SK17出土遺物(第29図、図版17・19)

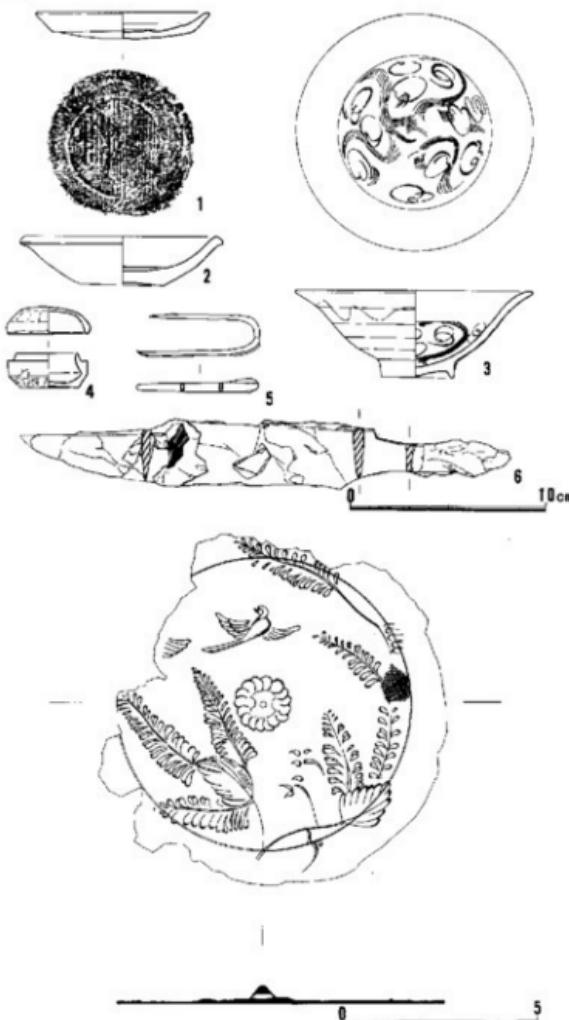
土師器

甌(1・2) 1の口縁端部は須恵器的につくられる。口縁部は丸く外反し、内面の稜は不明瞭である。胴部中位に最大径をとる。調整は口縁部が横ナデ、胴部は外面が刷毛目、内面はへラ削りされる。肩部内面には粘土紐の継ぎ目がみられる。胎土には粗い砂粒を含み、色調は明赤色を呈する。2の口縁部は丸味をもってくの字状に外反し、端部は細くおさめられ、凹線がつく。調整は口縁部が横ナデ、胴部は外面がへラナデ、内面はへラ削りされる。

瓶(3) わずかに内傾する胴部に、わずかに外反する口縁部をもつ。把手以下は失われてい

る。調整は口縁部が横ナデ、胴部は外面が刷毛目、内面ははへラ削りされる。

高杯(4) 須恵器の器形を模倣した高杯の杯部である。外面上半部は横ナデ、内面はカキ目その後横ナデ、外面底部は手持ちへラ削りをする。胎土には砂粒を少量含み、色調は橙色を呈する。



第28図 土墳墓出土遺物実測図 (1/3・2/3)

須恵器杯(5) 体部下位に稜をもち、口縁部でわずかに外反する。体部および内面底部は横ナデ、外面底部は平底で未調整である。

SK32出土遺物(第29図、図版17)

土師器甌(7) 屈曲部が肥厚し内側に稜をなし、強く外反する口縁部片である。

須恵器甌(6・8・9)

6・8は端部が肥厚し外面に段をなす口縁部片である。9は口縁部が肥厚し、玉縁状を呈する。口縁部外面に端部直下から、波状文1条、沈線3条、波状文2条、沈線1条を施す。

SK19出土遺物(第30図、図版19)

土師器杯(10) 外口縁部は欠失し底部はへラ切り離してへラ記号がみられる。器表が磨滅しており、調整について詳細は不明。

須恵器杯(11) 体部下位に稜をもち、外上方へのびる。体部および内底部は横ナデ、外底部は平底で未整整である。

SK20出土遺物(第30図、図版17)

須恵器杯(12) 端部が外方へ張り出す高台をもち、底部と体部の境には稜がつく。

SK08出土遺物(第30図、図版19)

須恵器杯蓋(13) 天井部と口縁部の境に凹線がつく。口縁部は丸味をもってわずかに開き、端部は丸くつくられる。

SK22出土遺物(第30図、図版19)

須恵器杯蓋(14・15) 14は天井部にカキ目を施し、内面にはアテ具痕がみられる。口縁部との境には段がつく。口縁部はわずかに開き、端部は外反し内面に稜がつく。15は天井部の上半はヘラ削りされ、口縁部との境には段がつく。口縁部は丸味をもって開き、端部は丸くおさめられている。

SK31出土遺物(第30図、図版19)

須恵器

杯蓋(16・17) 16は天井部と口縁部の境に段がつく。口縁部はわずかに開き、端部内面に段がつく、17は天井部に丸味をもち、口縁部との境に稜がつく。口縁部は丸味をもって開き、端部外面に刷毛目がつき、内面には段がつく。

杯身(18) 立ち上り基部の器壁は厚く、蓋受け部はシャープさを欠く。調整は内面および外面上半は横ナデ、外面下半は器表が磨滅しており不明。焼成は脆弱で、瓦質に近い。

河川SD02出土遺物(第31~33図、図版17・20~22)

土師器

杯(1) 口径13.7cm、器高3.3cm、底径7.0cmを測る。底部は平坦にヘラ切りされ、体部はやや内弯して外上方へのびる。外面体部下位がヘラ削りされる他は、内外面とも横ナデを施した後、ヘラ磨きされる。赤色顔料が塗布され、外底部に「川マ」と墨書きされている。

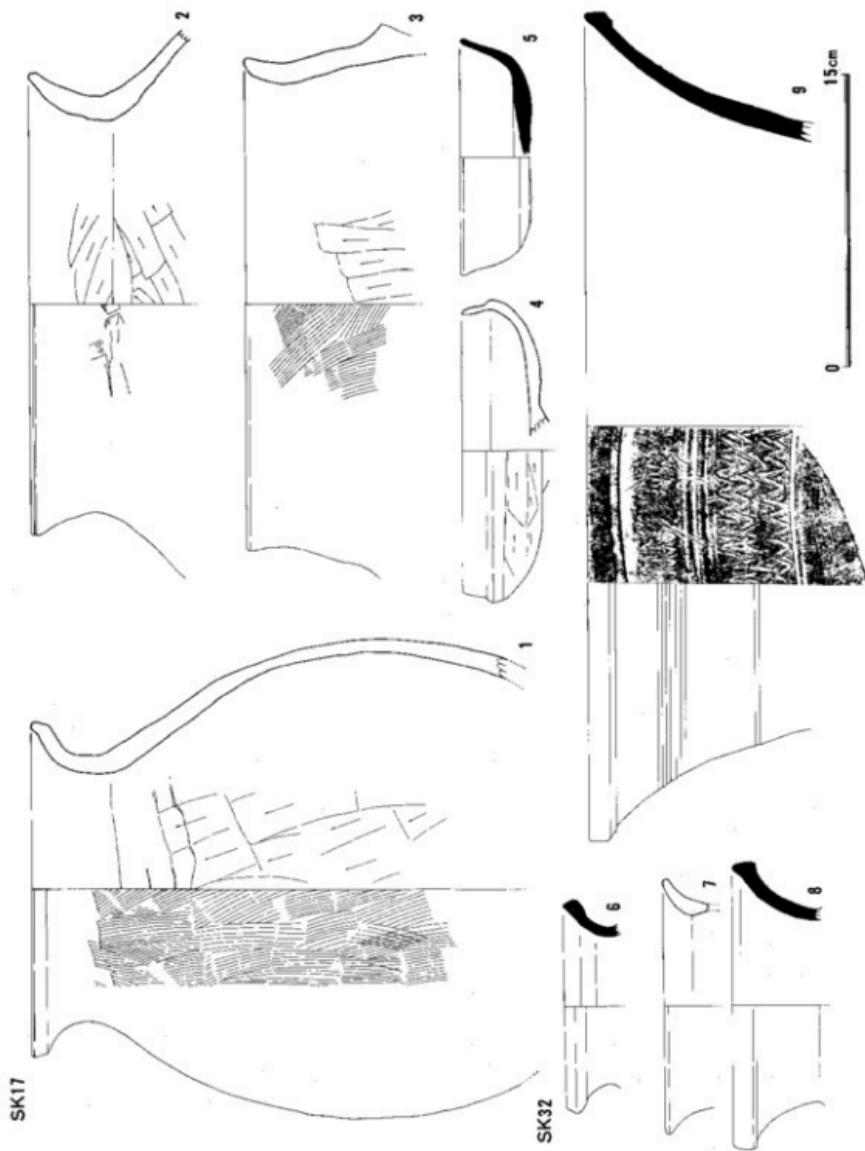
皿(2) 器周残存彌弱からの復元口径18.0cm、器高2.0cm、底径14.2cmを測る。底部はヘラ切りされ、体部は内外面とも横ナデされる。

椀(3) 体部は直線的に外上方にのびる。底部は平坦にヘラ切りされ、端部に外下方に開く高台が張り付けられる。体部は内外面とも横ナデされる。

須恵器

杯蓋(4・5) 4の大井部は水平で、外面は回転ヘラ削りされる。つまみは扁平なボタン状である。口縁部は断面三角形で内傾し、内面の体部との境は明瞭である。調整は内面天井部がナデ、体部・口縁部は横ナデである。4は同様の形状をとる体部以下の資料である。

杯(6~10) いずれも底部と体部に稜がつき、断面四角形の高台が底端部よりやや内側につ



第29图 土壤出土遗物实测图 (1) (1/3)

く。7・8は底部と体部の境がやや上位にあり、高台の端部が外側に跳ねる。調整は体部が横ナデ、内底部はナデ、外底部はヘラ切りされ、板状圧痕がみられる。

皿(11) 口縁部は内弯し、端部は細くおさめられる。調整は体部が横ナデ、内底部はナデ、外底部はヘラ切りされる。

甕(12・13) 口縁端部は肥厚し、外面に段をなす。

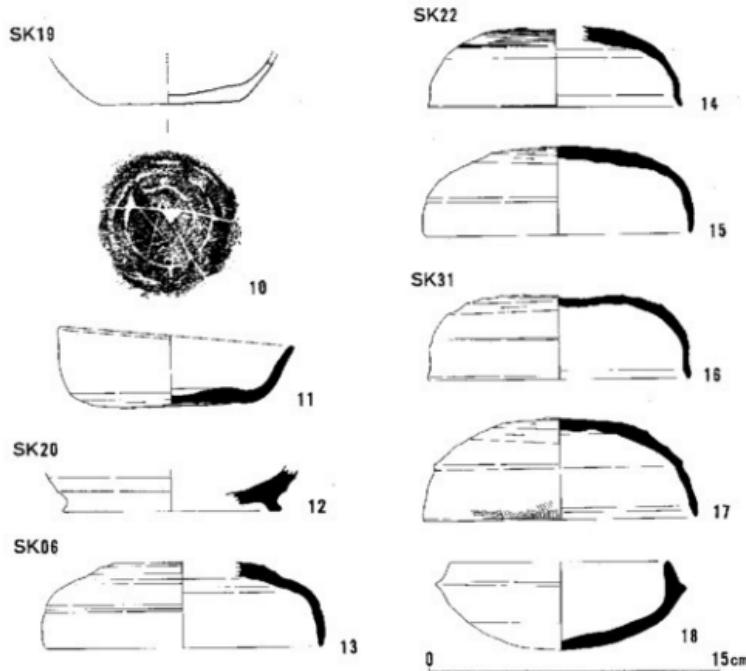
土師器

杯(14) 須恵器の器形を模倣している。調整は外面上半および内面はヘラ磨き。外面下半はヘラ削りを施す。胎土には粗い砂粒を多量に含み、色調は赤褐色を呈する。外面には黒色顔料を塗布する。

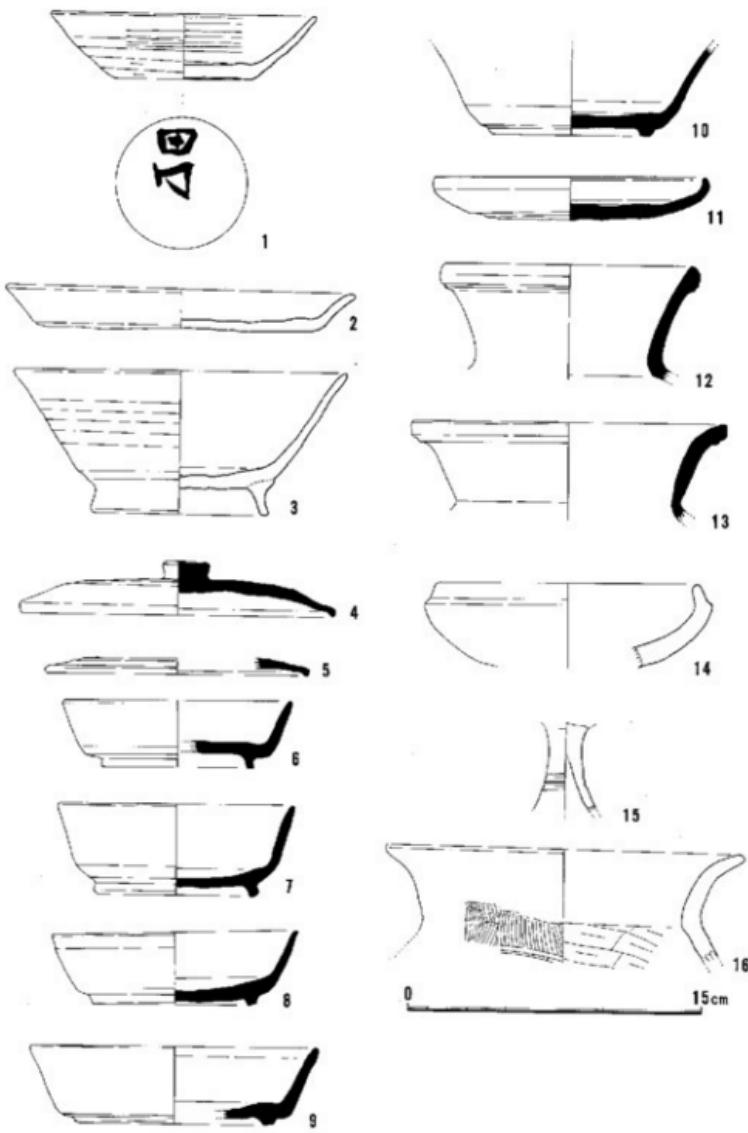
高杯(15) 須恵器の高杯を模倣した小型の脚部片で2条の沈線が入る。器表が磨滅しており、調整は不明。

甕(16) 口縁部はゆるやかに外反し、端部がさらに外反する。調整は口縁部が横ナデ、肩部は外面が刷毛目、内面はヘラ削りされる。

須恵器



第30図 土壌出土遺物実測図 (2) (1/3)



第31図 SD02出土土器実測図 (1) (1/3)

杯蓋(17~20) 口径13cm前後の17・18と口径11cm前後の19・20と分けられる。いずれも、天井部と口縁部の境に段、沈線はなく、丸くつくられ、口縁端部は丸くおさめられる。

17は口縁端部内面に凹線が入る。19・20は口縁端部で、わずかに外反する。

杯身(21~35) 21~25は立ち上りの高さが0.9~1.2cmを測り、基部から短く内傾する。26~35は立ち上りの高さが0.6~0.7cmを測り、基部から短く内傾する。29・34は立ち上りと受け部の境が不明瞭である。外底部は26が平坦で未調整である他は、丸味を残しヘラ削りされる。

その他の部位は横ナデを施す。27の外底部にはヘラ記号がみられる。

高杯(36) 長脚二段透しの無蓋高杯である。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめられる。口縁部と体部の境および体部の中位に段がつく。体部下半はヘラ削りされ、その他の部位は横ナデを施す。

壺(37) 直口縁壺の口頸部片で、口縁端部は丸くつくられている。口縁部直下に波状文、その下に凹線2条をめぐらせ、その間にも波状文を施す。内面下位にアテ具痕がみられ、その他の部位は横ナデを施す。

包含層出土土器(第33図、図版21・22)

越州窯系青磁碗(38) 低い輪状高台の底部片で、内底見込みと疊付に目アトを有する。釉は灰色を帯びたオリーブ色で全面にかけられ、胎土は灰色を呈する。I区Ⅲ層からの出土で、Ⅲ層下面で検出された製鉄関係遺構築造の時期の下限を示す資料である。

須恵器 I区V層からの出土で、製鉄関係遺構はこの層の上面で検出され築造時期の上限を示す。

杯蓋(39) 口径13.4cm、器高4.1cmを測る。天井は回転ヘラ削りし、内面にはアテ具痕がみられる。その他の部位は横ナデを施す。口縁部との境には段がつく。口縁部はわずかに開き、端部内面に段がつく。

杯(40) 口径11.5cm、器高5.4cmを測る。立ち上りは高さ16mmを測り、基部から直線的に内傾する。口縁端部内面に沈線状の段がつく。蓋受け部は水平である。底部は回転ヘラ削りし、削りの単位は小さい。その他の部位は横ナデを施す。

碌(41) 口頭部を欠失する。頭部の付け根は締めていない。

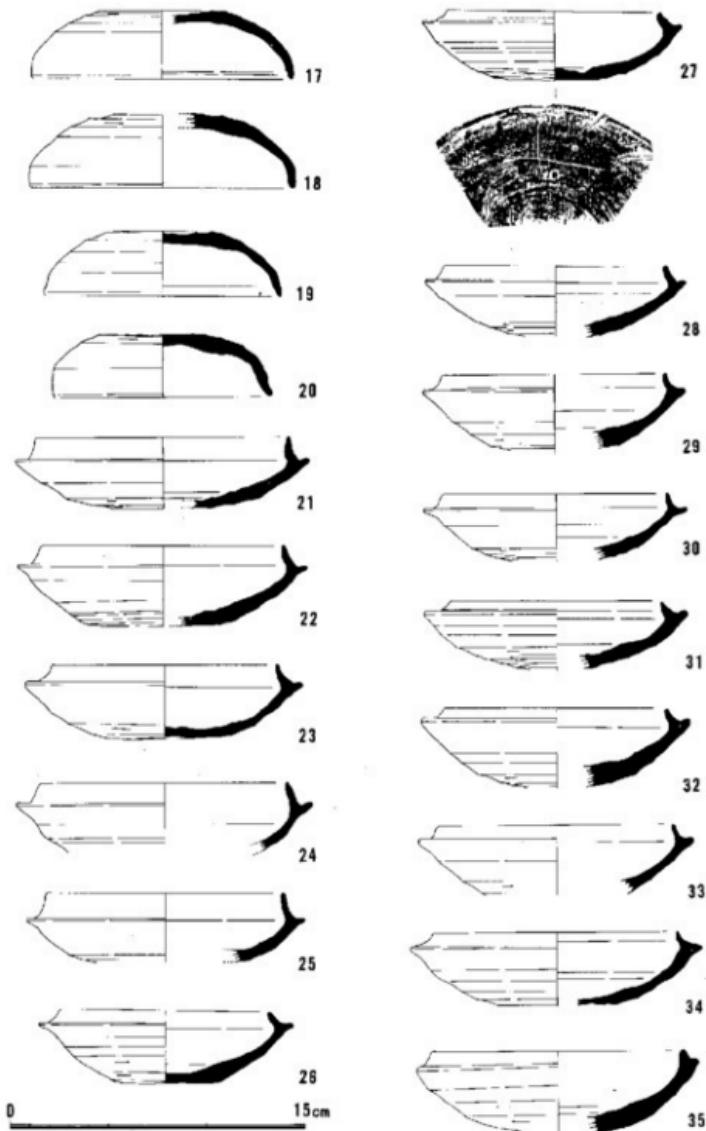
石製品

滑石製有孔円板(1~9)(第36図、図版22)

直径1.5~4.5cm、厚さ3~5cmの頂部に孔をうがった橢円形の板である。側面も含め丁寧に調整が施され平滑に仕上げられており、擦痕が明瞭に残る。いずれもSD02Ⅳ層からの出土。

土製品・金属製品(第34図、図版22)

土錐(10~12) 12はSD02Ⅳ層、10・11は同V層より下位からの出土で、12には10・11よりつくりにシャープを欠き、後にするタイプで土師質である。全長5.0cm、径1.5cmを測り、紡錘形



第32図 SD02出土土器実測図 (2) (1/3)

の形状をとる。10は一端を欠き、径1.6cmを測る。紡錘形の形状をとる。11は全長3.9cm、径1.7cmを測る棒状のもので、瓦質である。

鉄製品(13) 石帶の鈎尾のような形状をとる。残存長3.8cm、幅3.2cm、厚さ0.2cmを測る。一端が反り、径1mmの孔を穿つ。

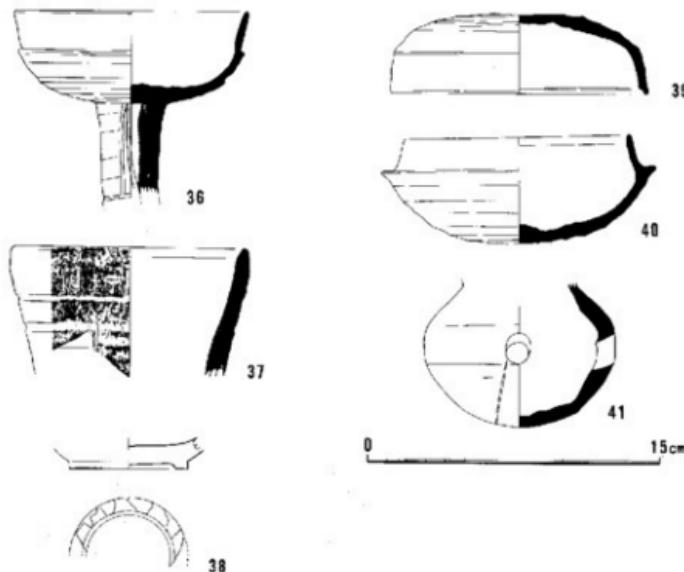
銅鏡(14) 初鑄年1008年の祥符通寶である。SD02Ⅳ層からの出土。

木製品(第36・37図)

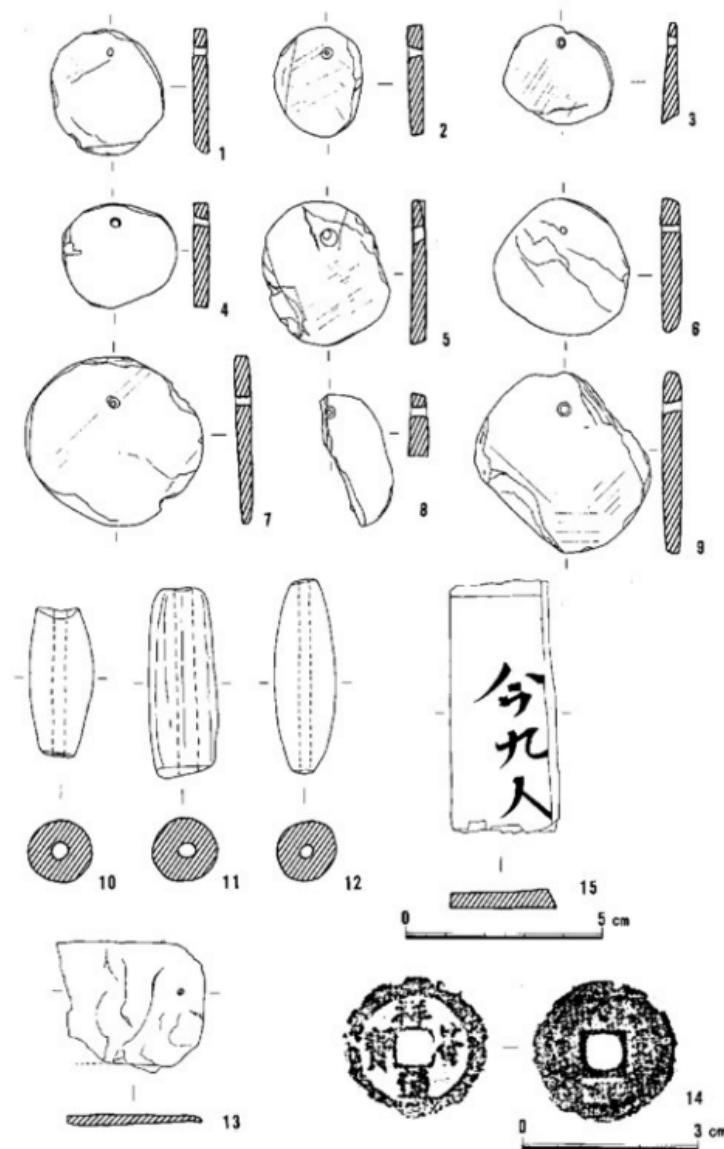
木簡(15) 「合九人」と墨書きされ、左辺以外は欠失している。上端部に切り込みがつく。

木製品 21・22 は一端に突起がつき、もう一端は欠失している。木鍤か。他の用途ははっきりしない。滑石製有孔円板同様の祭祀遺物であろうか。両端が欠失している。馬形であろうか。17は収縮により変形している。鳥形か。23は半分に割れ、先端が欠失しているが、陽物形木製品の基部か。他に図版に示す曲物等若干の木製品が出土したが整理の不手際で今回掲載できず、次報告に繰り返すものがある。お許しを乞う次第である。

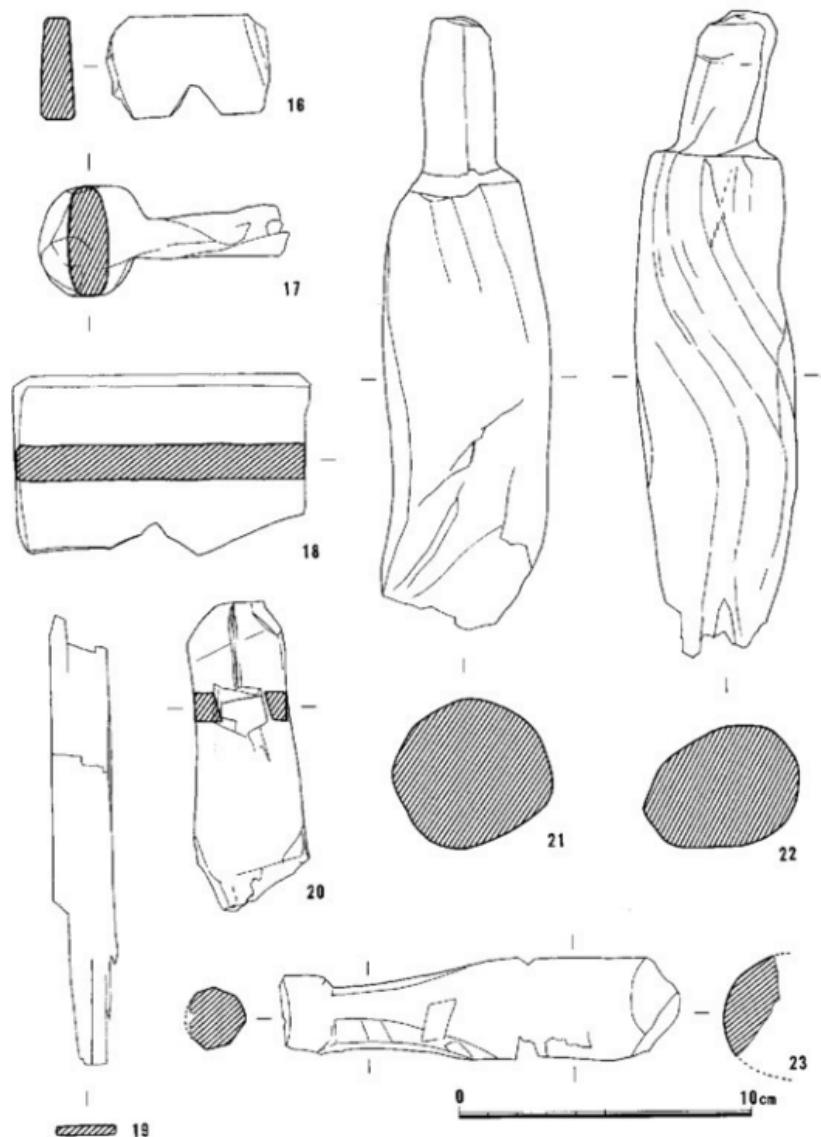
石器(第36図)



第33図 SD02出土器実測図 (3) (1/3)

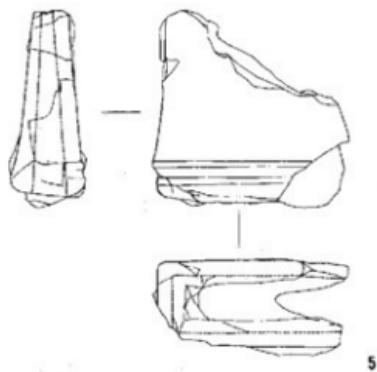
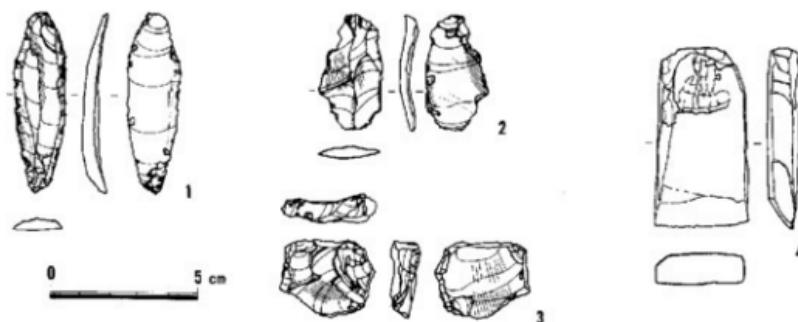


第34図 SD02出土遺物実測図 (4) (2/3・1/1)



第35図 SD02出土木製品実測図 (1/2)

1・2は使用痕のある剥片を利用しており、側縁に微細な刃こぼれがある。3は小型の石核である。正面と背面を剥片剥離作業面とし、正面は右と上から寸詰まりの小剥片を、背面は上から1枚の剥片を作出している。上面と右側面に打面を形成している。1～3の石材は白色粒子の混入した漆黒色の黒曜石で、原産地は佐賀県の腰岳であろう。4は小型の扁平片刃石斧である。打ち欠きで整形し、研磨で仕上げている。刃部は直刃で刃こぼれがある。完形品。石材は縦に節理の入った頁岩である。以上の石器は2・3がII区SK22から出土した。



鉄器(第36図、図版16)

鋳造鉄斧(5)刃部は欠損している。基部は袋状をなし、2条の突帯がめぐる。SB44柱穴からの出土で、SB44を構成する他の柱穴からは、弥生土器片が出土している。

3. 小 結

SK01土壙墓埋納遺物について

今回の調査区域内では他にSK01土壙墓と同時期の土壙墓・木棺墓が全くみられなかったことから、SK01土壙墓の被葬者は集落内での有力者であったと推定されよう。SK01土壙墓内の化粧箱に納められていた一連の追善供養のための遺物は被葬者の遺品であろうが、同時期、12世紀前半代に盛んに造営された経塚の埋納遺物と共通するものが少なくない。当時の経筒に記された願文の中には、その造営の趣旨が特定個人の追善供養のためと記したものがある。土壙墓・木棺墓への被葬者の遺品埋納・追善供養のための経塚造営のいずれも特定個人を追善供養するという行為で、その媒体が経巻か遺体かの違いである。末法思想・弥勒信仰に基づき永く後世に経典を伝えることを願った経塚造営本来の趣旨が、12世紀前半代には追善供養に転換したことにより、両者の埋納遺物に共通点がみられるようになったのであろう。

福岡市域における化粧箱の検出例としては、博多遺跡群－都市計画道路博多駅築港線拡幅に伴う第2次調査-683号土壙のものがあり、時期は七反田遺跡SK01土壙墓検出のものより約半世紀下った12世紀中頃と報告されている。漆塗りの桜花文を蒔絵で施した長辺約23.5cm、短辺約16.5cmの化粧箱で、内部は懸子により2段に仕切られる。懸子には湖州八稜鏡・櫛・鉢・鍤・櫛払い刷毛、懸子の下にはお南黒壺とみられる褐釉小壺・水引が置かれていた。七反田遺跡SK01土壙墓では、木質は腐朽しつつも遺存していない。腐朽し易い櫛・刷毛等が納められていた可能性も考えられよう。

SD02河川出土の祭祀遺物について

SD02河川からは滑石製有孔円板が出土しているが、頂部に孔をうがった楕円形の有孔円板は沖ノ島の露天の祭祀遺構で滑石製形代の中にその大型品がみられ、8世紀に時期が比定されている。SD02河川からは他に祭祀遺物とみられる木製品も出土している。多量の鉄滓、孔をうがったものも中にみられる桃種についても祭祀的性格を有するのではないだろうか。福岡市域では、早良平野を中心として古墳に鉄滓を供献する例が多く知られている。SD02河川出土のものは、台地部に製鉄関係遺構がみられたことから、調査区周辺からの流れ込み、廃棄、供獻のいずれかであろうが、流れ込み、廃棄の場合であっても鉄滓が散在した状況にたいして祭祀行為がなされたことも考えられはしないだろうか。

〈参考文献〉

- 中野政樹編 『和鏡』(『日本の美術』42) 1969
- 福井県立博物館 『古鏡の美～出土鏡を中心～』 1986
- 福岡市教育委員会 『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(II)博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集 1988
- 奈良国立博物館 『延喜式宝』1977
- 福岡県教育委員会 『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書X VIII』1977
- 福岡県教育委員会 『干渴遺跡』福岡県文化財調査報告書第59集 1980
- 福岡市教育委員会 『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 1987
- 福岡県教育委員会 『牛頭窓跡群Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第89集 1989
- 小田富士雄編 『<古代を考える>沖ノ島と古代祭祀』 1988

番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	器種	口径	器高	底径	器周の残存	色調
1	25	16	SB04	土師器	甕	14.3			1/4	赤褐色
2	〃	15	〃	須恵器	杯・蓋	14.3	4.4		2/3	明赤褐色
3	〃	16	SB11	土師器	甕	14.4			1/4	淡青灰色
4	〃	〃	〃	須恵器	杯・蓋	14.4			1/4	淡青灰色
5	〃	〃	〃	須恵器	杯・身	14.8			1/8	青灰色
6	〃	〃	〃	須恵器	杯・身	13.8			1/4	淡青灰色
9	〃	〃	〃	須恵器	高杯	15.8			1/5	青灰色
1	26	15	Pit440	須恵器	甕			(14.0)	1/4	青灰色
2	〃	〃	〃	内黒土器	甕			(8.1)	1/2弱	
3	〃	16	Pit530	内黒土器		(14.8)			1/10	淡赤褐色
4	〃	〃	Pit327	須恵器	杯・蓋					淡青灰色
5	〃	〃	Pit616	須恵器	杯・身					青灰色
6	〃	〃	Pit225	須恵器	杯・身			6.4	1/7	明青灰色
7	〃	〃	Pit228	須恵器	杯・身					青灰色
8	〃	15	Pit569	土師器	甕	12.2	8.4			赤褐色
9	〃	〃	Pit379、380	土師器	甕	12.8			3/8	明赤褐色
10	〃	16	Pit549	土師器	瓶	28.2			1/10	明赤褐色
11	〃	〃	Pit580	土師器	甕	26.6			1/8	明赤褐色
12	27	17	Pit37	土師器	甕	15.5			1/7	暗赤褐色
13	〃	〃	Pit508	須恵器	杯・蓋	(14.6)	4.1		1/8	淡青灰色
14	〃	〃	Pit324	須恵器	杯・身	(13.4)			1/7	青灰色
15	〃	〃	Pit228	須恵器	甕				1/8	淡青灰色
16	〃	〃	Pit37	須恵器	杯・蓋				1/8	青灰色
17	〃	〃	Pit603	須恵器	杯・身				1/6	灰褐色
18	〃	〃	Pit62	須恵器	杯・蓋	(14.4)			1/4	青灰色
19	〃	15	Pit560	弥生土器	甕				1/3	淡赤褐色
20	〃	〃	SB46	弥生土器	甕					明赤褐色
21	〃	〃	Pit528	弥生土器	甕					明赤褐色
22	〃	17	Pit160	弥生土器	甕					淡赤褐色
1	28	18	SK01	土師器	小皿	8.9	1.4	7.2		明赤褐色
1	29	19	SK17	土師器	甕	17.3				明赤褐色
2	〃	17	〃	土師器	甕	(23.6)			1/8	淡赤褐色
3	〃	19	〃	土師器	甕	(25.2)			1/3	黑色より赤褐色
4	〃	〃	〃	土師器	高杯	(14.4)			1/4	橙色
5	〃	〃	〃	須恵器	杯・身	(12.2)	3.6	(7.2)	1/4	灰色
6	〃	17	〃	須恵器	甕	(10.3)			1/4	淡青灰色
7	〃	〃	SK32	土師器	甕	(13.2)			1/8	赤褐色
8	〃	〃	〃	須恵器	甕	14.8			1/5	青灰色
9	〃	〃	〃	須恵器	甕	42.4			10/12	青灰色
10	30	19	SK19	土師器	杯			7.0		淡赤褐色
11	〃	〃	〃	須恵器	杯・身	12.2	3.6	7.8	1/4	灰黑色
12	〃	17	SK20	須恵器	杯・身				1/10	青灰色
13	〃	19	SK06	須恵器	杯・蓋	14.4			1/4	淡青灰色
14	〃	〃	SK22	須恵器	杯・蓋	(13.2)	(4.1)		1/4	淡青灰色

第3表 出出土器一覧表(1)

番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	器種	口径	器高	底径	器周の残存	色調
15	30	19	"	須恵器	杯・蓋(14.0)	4.5			1/8	淡灰色
16	"	"	SK31	須恵器	杯・蓋					青灰色
17	"	"	"	須恵器		14.2	5.2		3/4	淡青灰色
18	"	"	"	須恵器	杯・身	11.3	4.6		1/5	淡青灰色
1	31	20	SD02	土師器	杯	13.7	3.3	7.0		明赤褐色
2	"	"	"	土師器	皿	(18.0)	2.0	(14.2)	1/2	淡黄褐色
3	"	"	"	土師器	椀	17.2	7.3	9.1		淡黄褐色
4	"	"	"	須恵器	杯・蓋	16.2	2.8			淡青灰色
5	"	"	"	須恵器		13.5			1/6	暗青灰色
6	"	20	"	須恵器	杯・身	11.9	3.4	7.8	1/4	青灰色
7	"	"	"	須恵器		12.2	4.7	9.5	1/4	淡赤灰色
8	"	"	"	須恵器					1/8	青灰色
9	"	17	"	須恵器		14.8	4.0	10.2	1/5	灰白色
10	"	20	"	須恵器				8.2		灰色
11	"	"	"	須恵器	皿	14.2	2.2	10.3		淡灰色
12	"	17	"	須恵器	甕	13.4			1/3	灰黑色
13	"	"	"	須恵器		16.1			1/3	灰色
14	"	"	"	土師器	杯					赤褐色
15	"	"	"	土師器	高杯					淡赤褐色
16	"	20	"	土師器	甕	18.3			1/4	淡赤褐色
17	32	"	"	須恵器	杯・蓋(13.3)	3.5			1/4	黑灰色
18	"	21	"	須恵器					1/3	青灰色
19	"	"	"	須恵器		(12.2)	3.3		1/6	黑灰色
20	"	"	"	須恵器					1/2	青灰色
21	"	22	"	須恵器	杯・身(13.4)	3.6			1/4	淡赤灰色
22	"	21	"	須恵器					1/2	淡青灰色
23	"	"	"	須恵器					1/3	灰色
24	"	"	"	須恵器		(12.6)	3.5		1/3	淡灰黑色
25	"	21	"	須恵器					1/4	青灰色
26	"	"	"	須恵器		10.7	3.8		1/2	淡赤灰色
27	"	"	"	須恵器		10.9	3.4			黑灰色
28	"	22	"	須恵器		(11.3)	3.7+α		1/4	淡青灰色
29	"	"	"	須恵器		(11.3)	3.8+α		1/6	淡青灰色
30	"	"	"	須恵器		(11.3)	3.4		1/5	淡青灰色
31	"	"	"	須恵器		(10.7)	3.4+α		1/3	淡灰色
32	"	"	"	須恵器		(11.4)	4.0+α		1/6	淡青灰色
33	"	"	"	須恵器		(12.0)	3.5+α		1/5	赤灰色
34	"	"	"	須恵器		(12.5)	3.7		1/4	淡青灰色
35	"	21	"	須恵器		(12.8)	4.2		1/2	淡青灰色
36	33	"	"	須恵器	高杯	12.1			1/2	青灰色
37	"	22	"	須恵器	甕	12.1			1/6	淡青灰色
39	"	21	包含層	須恵器	杯・蓋	13.4	4.1			淡青灰色
40	"	"	"	須恵器	杯・身	11.5	5.4		1/2	青灰色
41	"	"	"	須恵器	杯・					淡青灰色

第4表 出土土器一覧表(2)

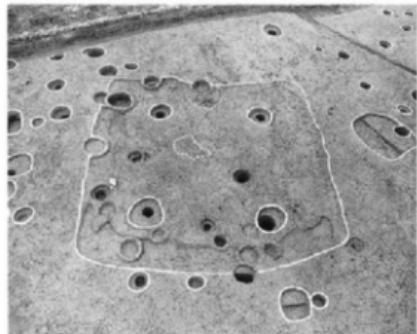
図版



1. 都地遺跡 4 次 I 区全景（北から）



2. 都地遺跡 4 次 II 区全景（南から）



1. I区 SC-11 (南東から)



2. I区 SK-01 (南から)



3. I区 SK-18 (東から)



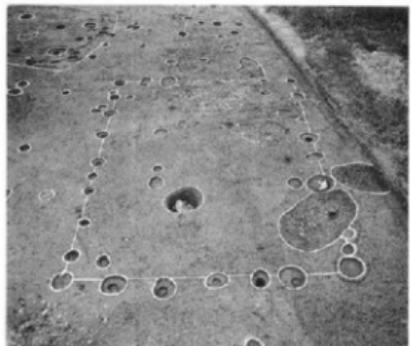
4. I区 SX-15 (北西から)



5. I区 SB-03.04 (南東から)



6. I区 SB-07 (南から)



1. I区 SB-12 (南から)



2. I区 SB-13 (南から)



3. II区 SB-27 (北から)



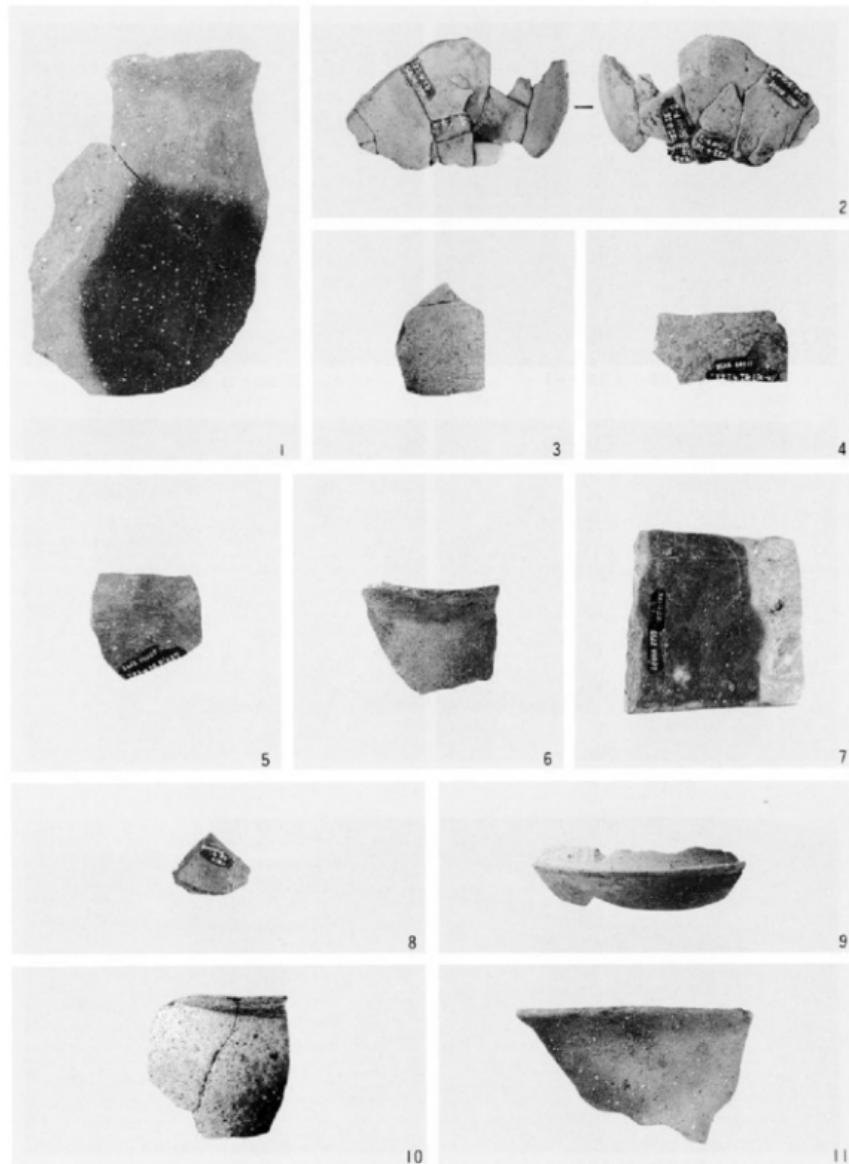
4. II区 SB-29 (西から)



5. II区 SB-31 (北西から)



6. II区 SB-32,33,34,35,36 (西から)



都地遺跡 4 次出土遺物 (1/3)



調査区周辺空中写真



1. I区全景（南から）



2. II区全景（南から）



3. II区南（北から）



4. SD02南岸（V層掘り下げ後、東から）



5. SD02北岸（東から）



6. SD02土層（東から）



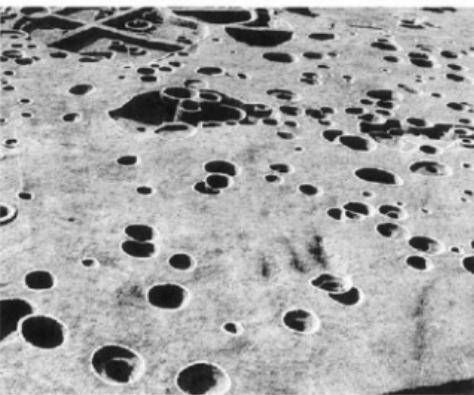
1. SB40建物（南東から）



2. SB41・42建物（東から）



3. SB43・44建物（東から）



4. SB44建物（東から）



5. SB48～50建物（東から）



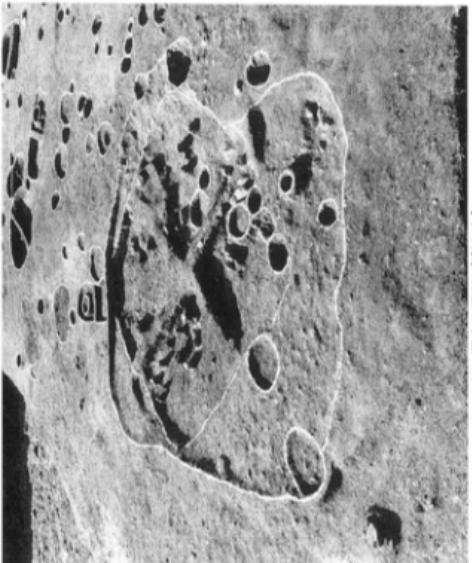
6. SB46・47建物（東から）



1. SB11b空洞構造 (東から)



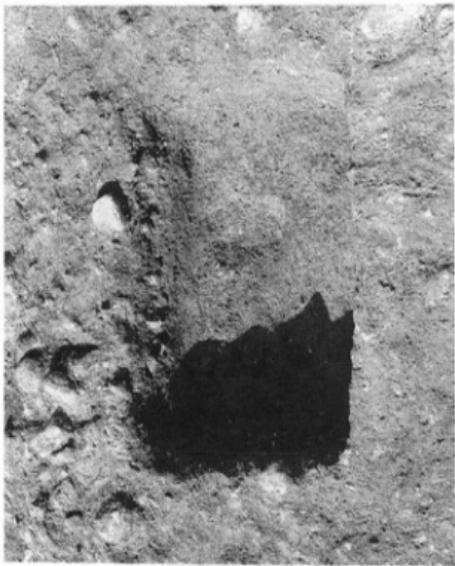
2. SB11a空洞構造・かまど (南東から)



1. SB11c空洞構造 (東から)



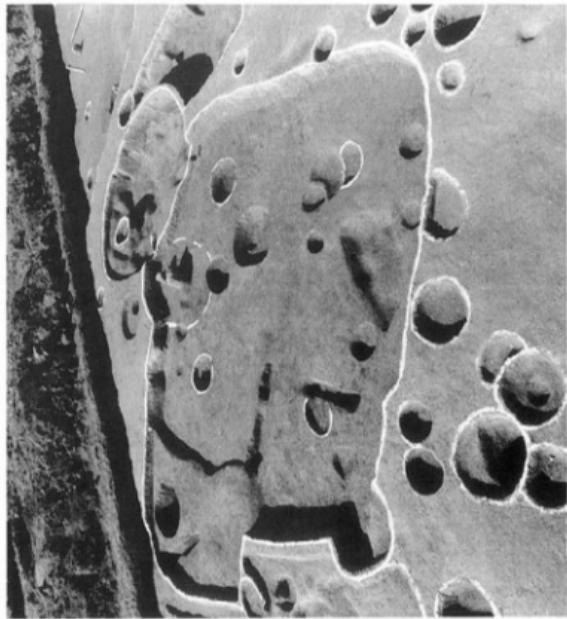
2. SB11d空洞構造・かまど (南東から)



2. SK15土壤(南から)



1. SK14土壤(南から)



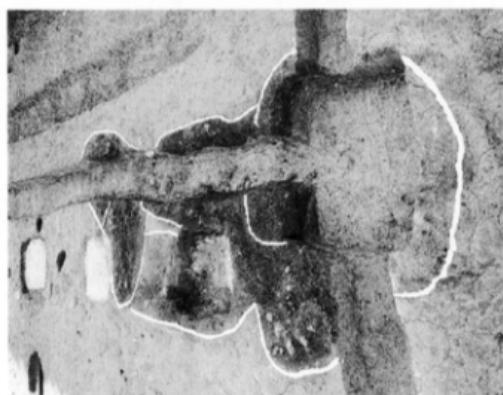
1. SB15堅穴性居地(東から)



1. SXJ1・1号鉄関係遺構（西から）



2. 鉄鉢関係遺構（南から）



1. 鉄鉢関係遺構（北から）



1. SX37・38製鉄関係遺構土層（北から）



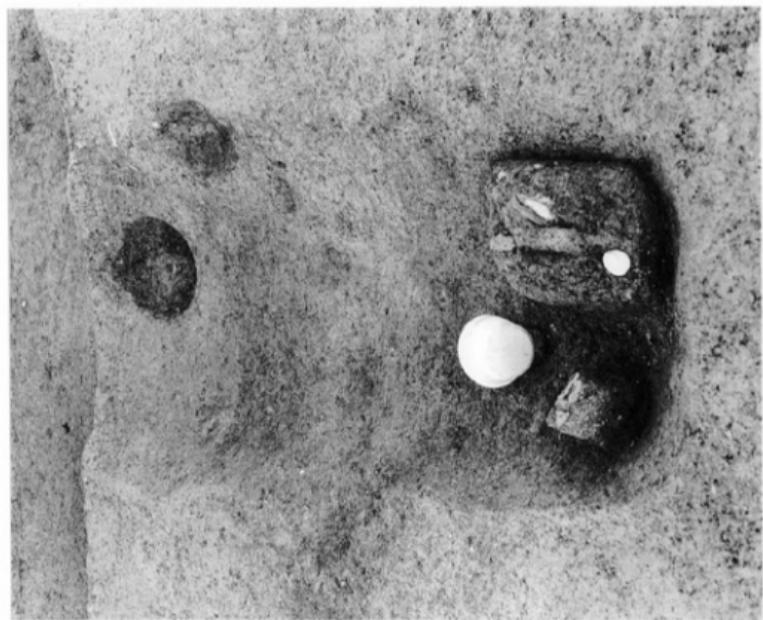
4. SX15製鉄関係遺構土層（東から）



1. SX36製鉄関係遺構土層（東から）



2. SX33製鉄関係遺構上層（雨から）

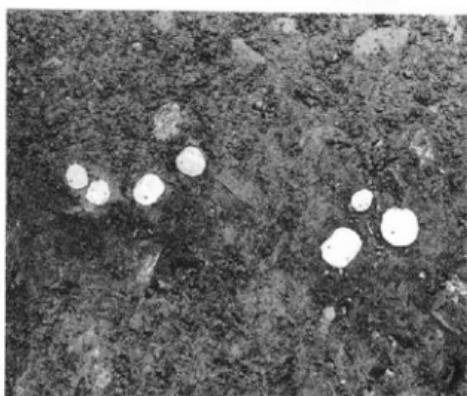


1. SK01土塚墓（西から）



2. SK01土塚墓化粧箱出土状態（北から）

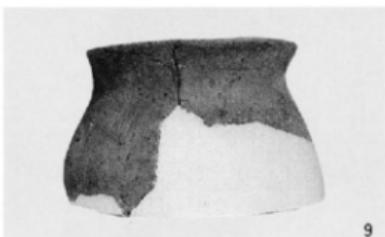
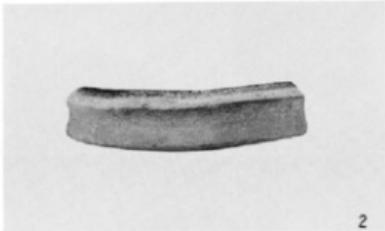




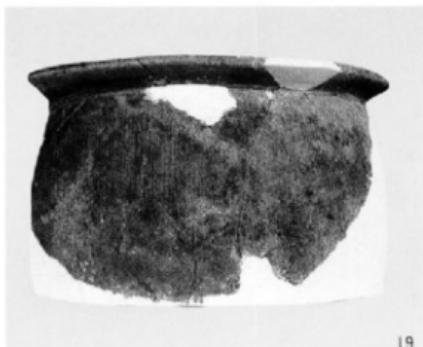
SD02河川遺物出土状態 (1)

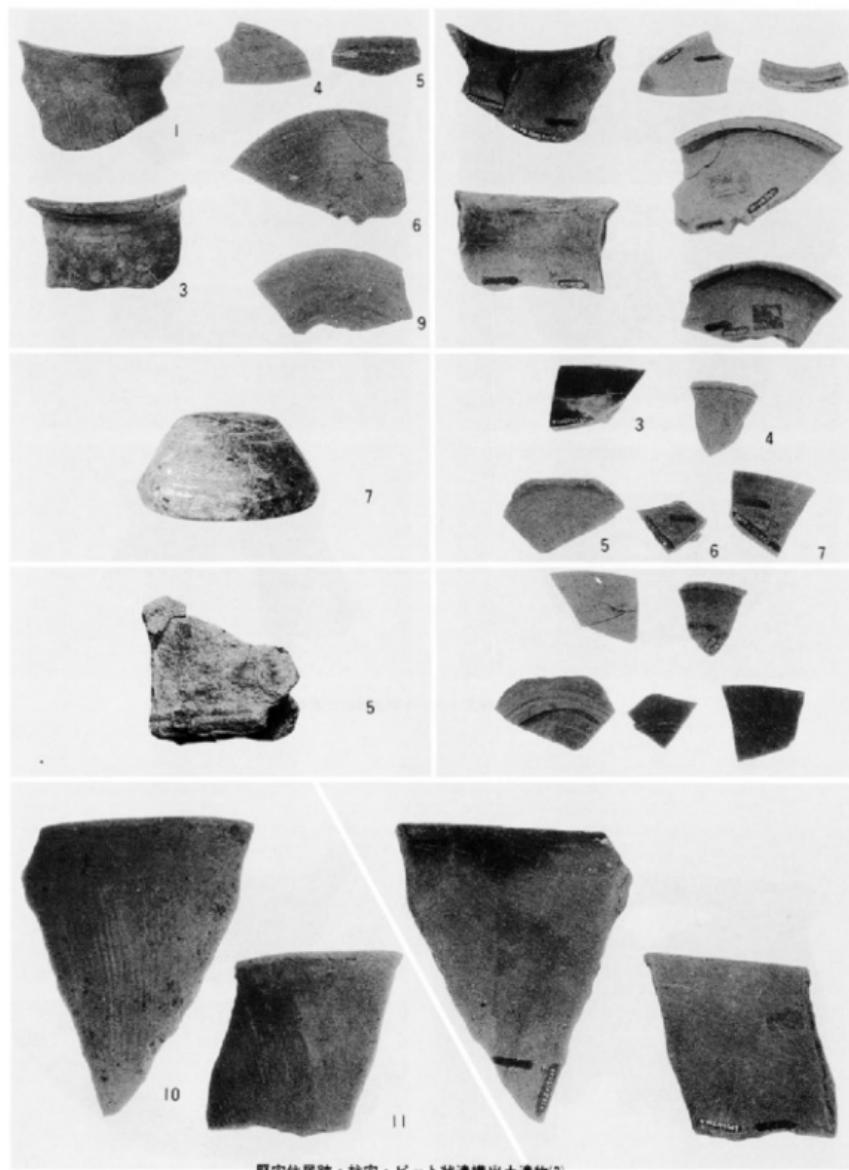


SD02河川遺物出土状態 (2)

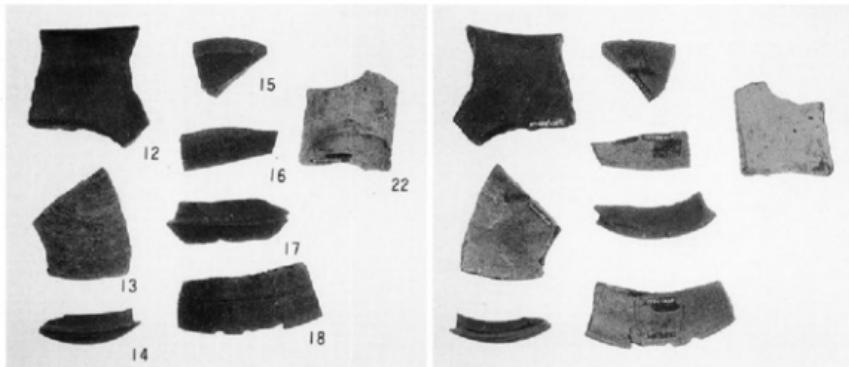


整穴住居跡・柱穴・ピット状遺構出土遺物(1)





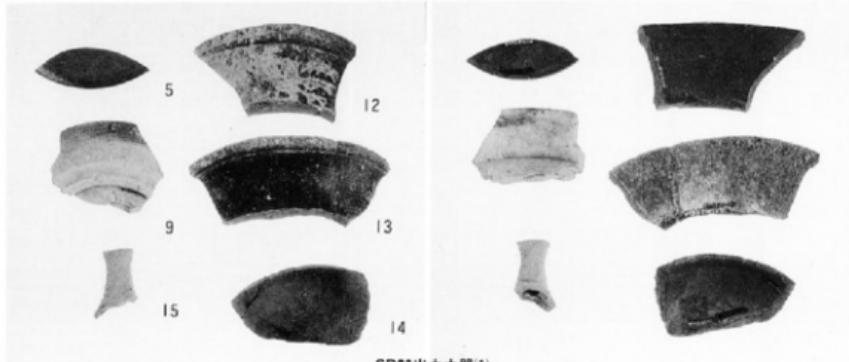
竪穴住居跡・柱穴・ピット状構出土遺物(2)



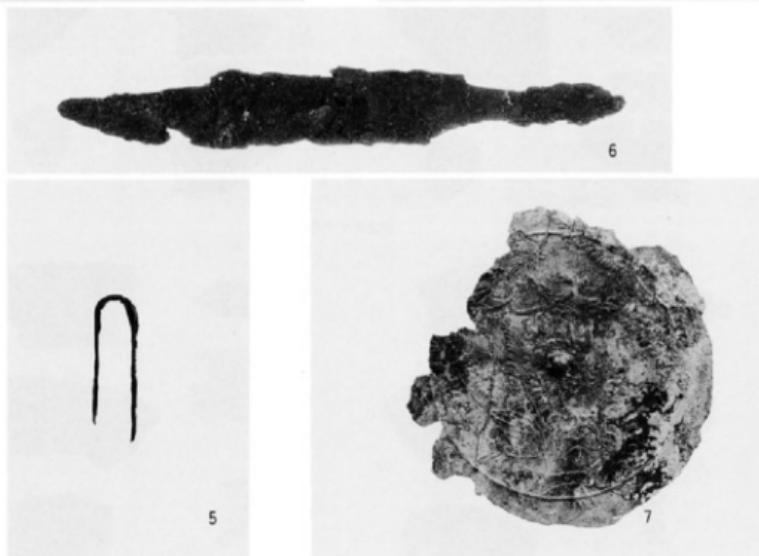
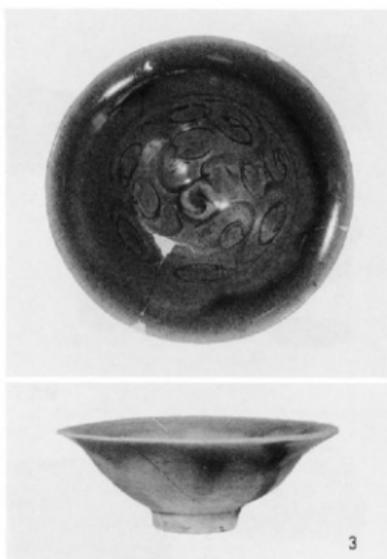
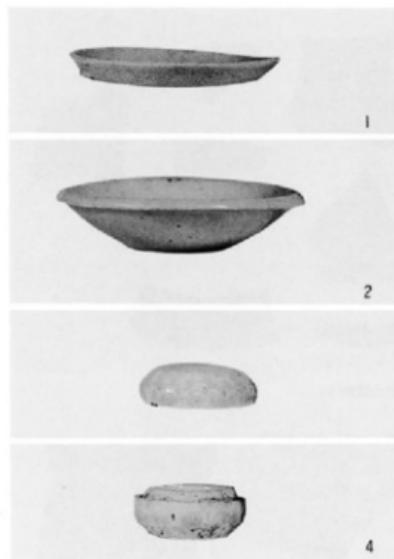
豊穴ピット状遺構出土遺物(3)。

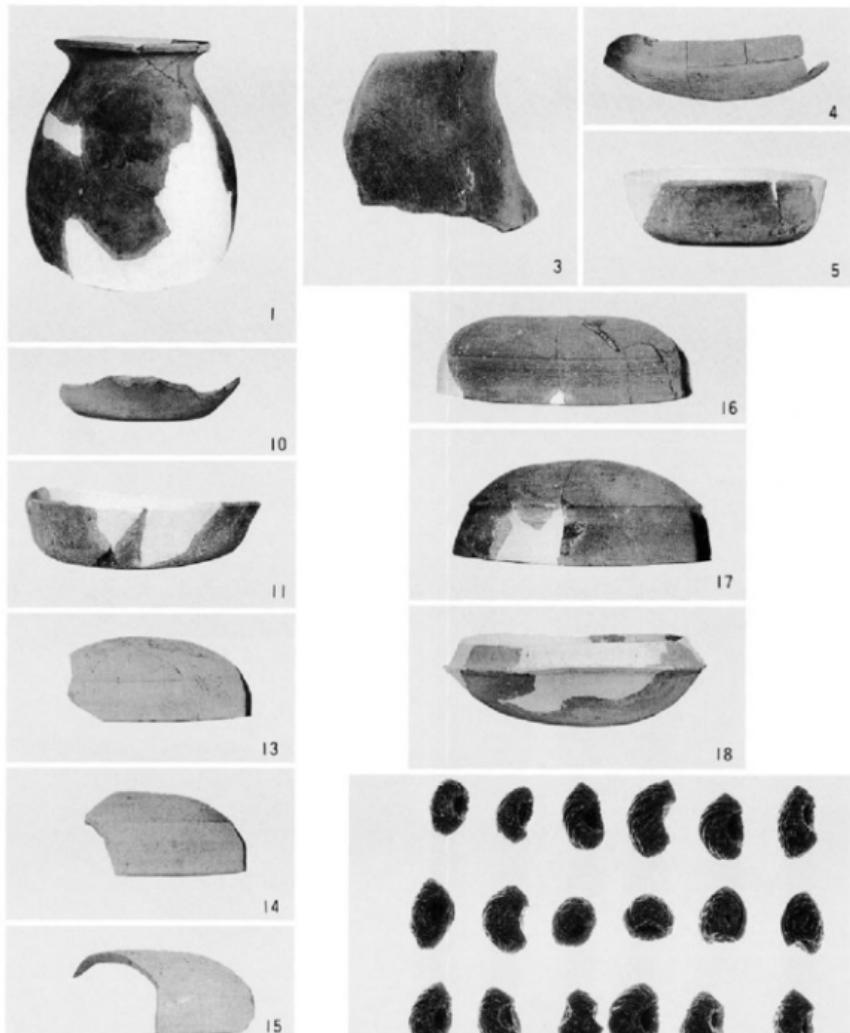


土壤出土土器(1)

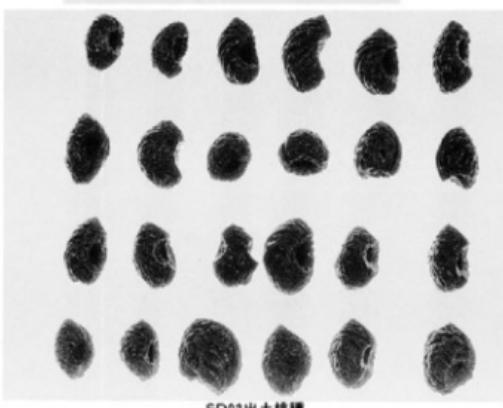


SD02出土土器(1)

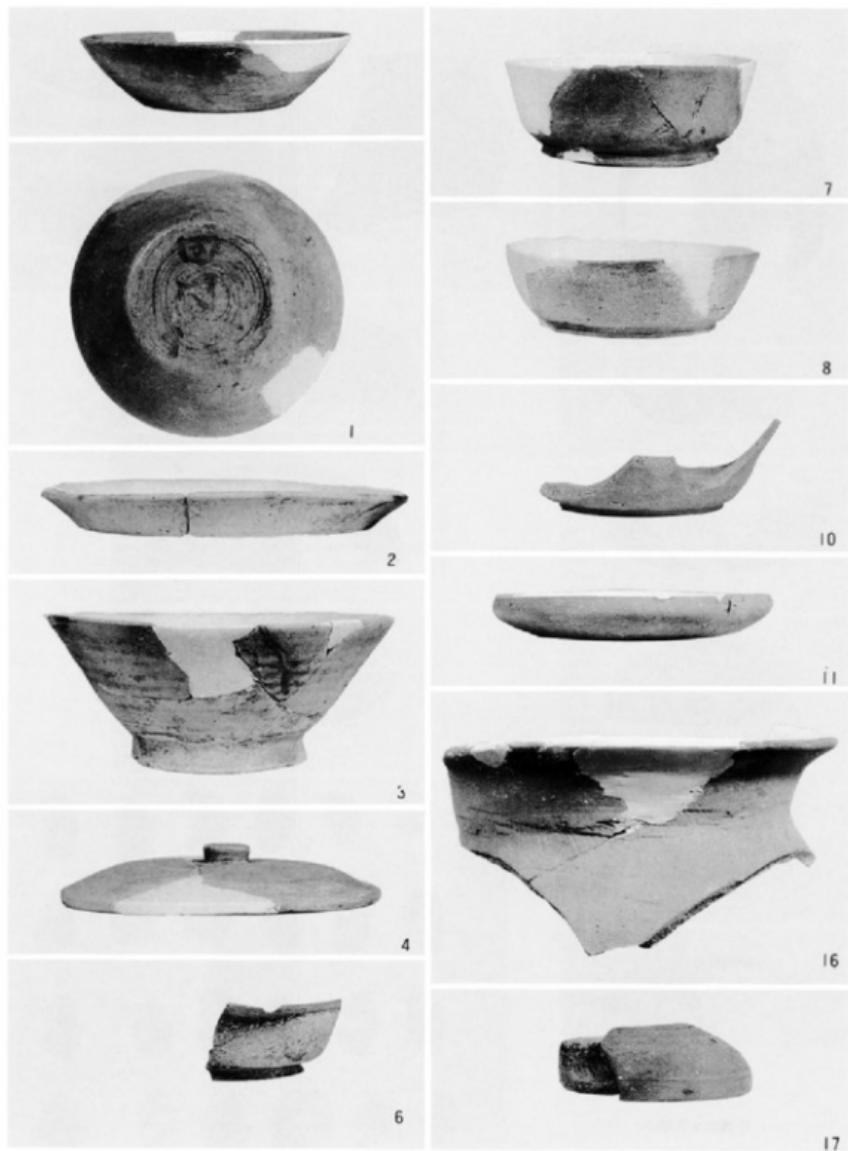




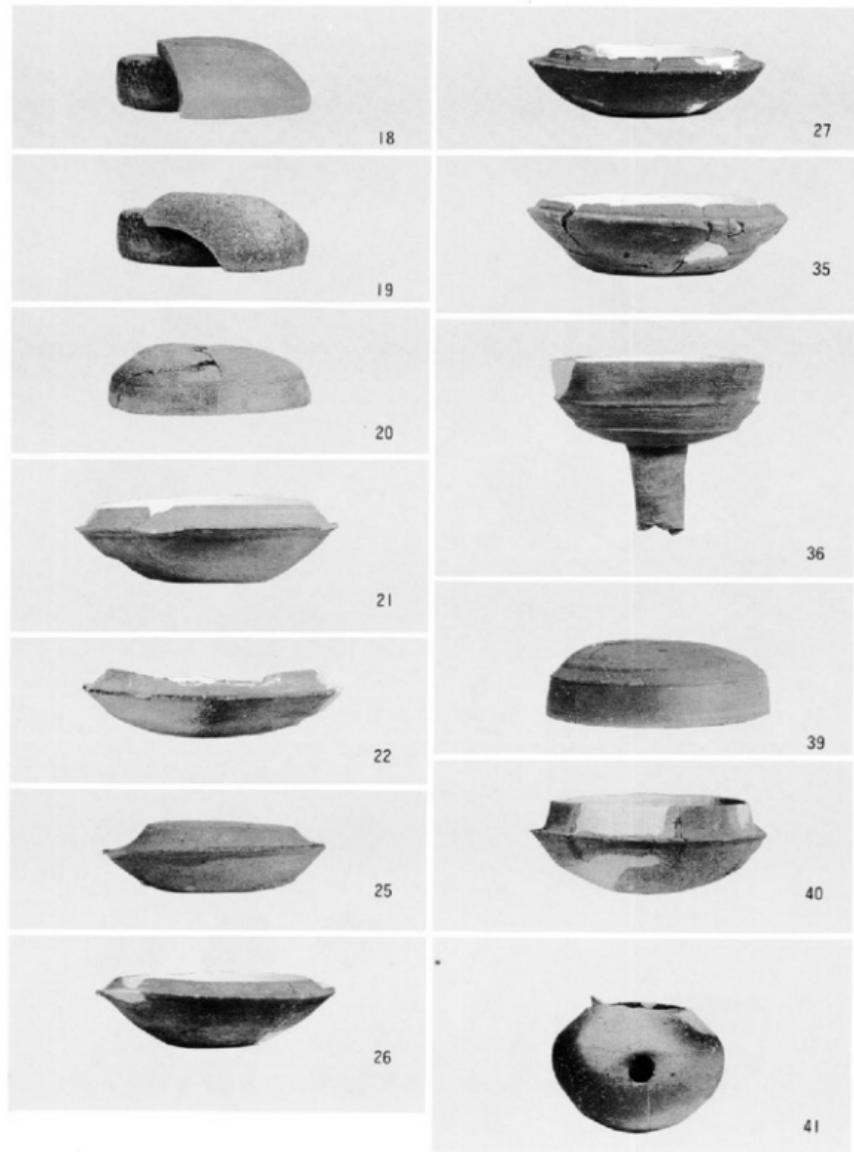
土壤出土土器(2)。



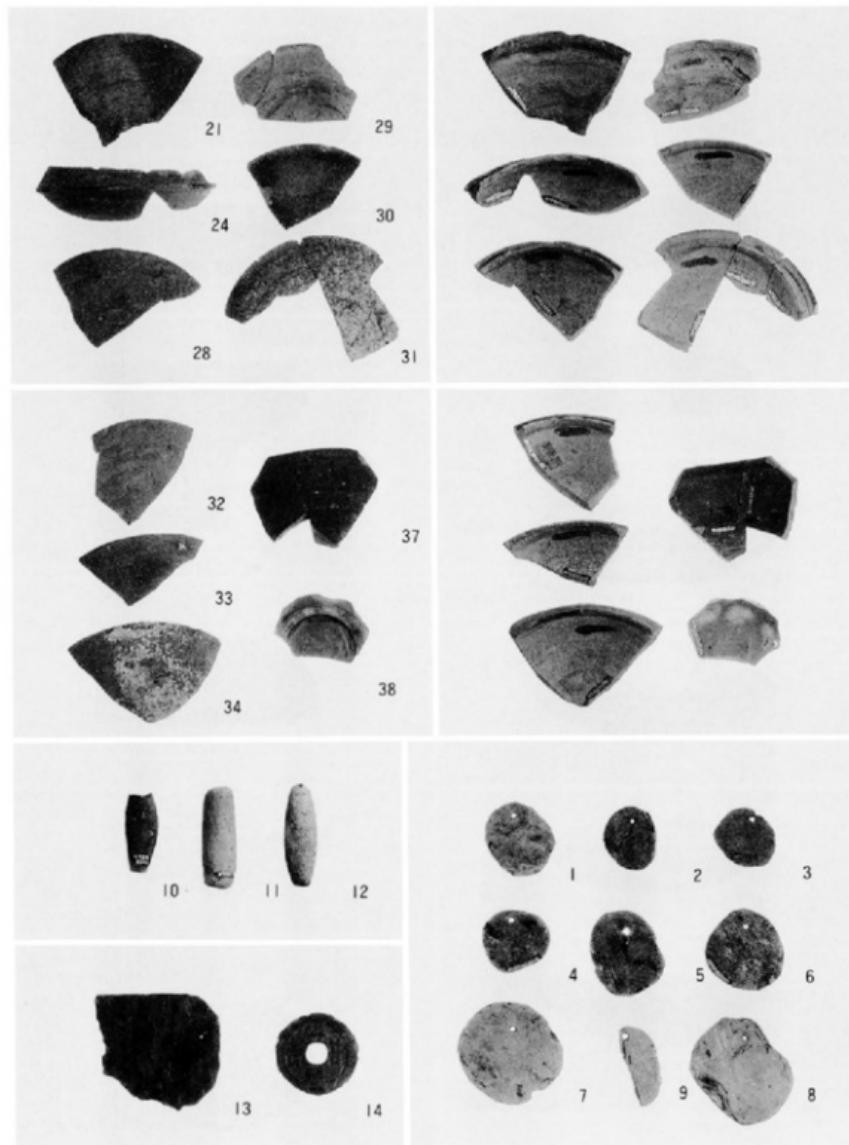
SD02出土核種



SD02出土土器(2)



SD02・包含層出土遺物(1)



SD02・包含層出土遺物(2)

都地・七反田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集

平成2年3月 発行

福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 赤 坂 印 刷 (株)

